

# 清末小説から 132

2019.1.1

- いくたびかの阿英目録22……………樽本照雄 1  
自爆する日中の研究者たち3完——清末小説と林訳をめぐって……………樽本照雄 4  
莎劇のようなもの(下)——文明戯シェイクスピア……………神田一三2  
清末小説から27

★本年もよろしくお願ひいたします。『林紓訳文全集』全47冊が刊行されました。本誌次号でご紹介するつもりです。樽本『清末小説三談』の公開が近づいています。目次は本ウェブサイト

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 8 番4-202 樽本照雄方

## いくたびかの阿英目録22

樽本照雄

### 発行遅延問題と編者および盗用事件

『繡像小説』発行遅延問題は、盗用関係に決定的な影響をあたえる。盗用のある問題の「文明小史」第59回は李伯元の死去後に執筆発表されたからだ。

死者が原稿を書くだろうか。李伯元は肺病をわずらっていた\*69。

代作はほかの作品にも見える。李伯元の別作品「活地獄」の最後部分第40-42回は繭叟(吳趸人)が続作する。第43回は茂苑惜秋生(歐陽鉅源)が代作して終了した。李伯元と同じくらいに著名な吳趸人に李伯元の筆名南亭亭長を使わせるわけにはいかなかったようだ。

『繡像小説』発行遅延問題は、当然の結果として作品論に影響をおよぼす。

研究者の全員が李伯元の「文明小史」だとして論じている。だがもはや従来の「文明小史」論は成立しなくなった。歐陽鉅源という著者を考慮に入れない作品論は意味をもたないのである。

「文明小史」の最後部分が欧陽鉅源の代作だ。ここに彼が劉鉄雲「老残遊記」原稿から第11回部分を盗用して挿入した\*70。

これほど重要な事実をなぜ無視するのか。中国人研究者がこの問題に関して示した無反応ぶりは、私の理解を超えている。

ここで汪家燭がくりひろげた劉鉄雲が李伯元

を逆に盗用したという新説をあらためて検討する。すでにそれ自体が破綻していることは明らかだ。発行遅延問題をからめるとどうなるか。別の側面から検証を行なう。

汪家熔のいうように劉鉄雲が李伯元を盗用したと仮定する。それは成り立つのか。

乙巳(1905)年十月初三日に「老残遊記」第11回を新しく書き下ろしたと曲解した汪家熔説を前提にして考える。

どうなるか。

『繡像小説』発行遅延説を援用する。「文明小史」第59回が掲載された該誌第55期の刊行は丙午(1906)年六月頃になる。

劉鉄雲が「老残遊記」第11回をかりに「新しく書き下ろした」としても、それは乙巳(1905)十月初三日なのだ。「文明小史」第59回よりもはるかに先行する。時間の前後からだけ見ても先行する劉鉄雲がのちの「文明小史」第59回を盗用することは不可能である。

ここでも汪家熔の反論は崩壊している。

### 盗用事件をめぐる

「文明小史」が「老残遊記」原稿から盗用したことは確かだ。その実行者は欧陽鉅源だと考えて間違いはないだろう。

ただしその盗用があったことを当の劉鉄雲は知らなかった。息子の大紳も同様に気づいていない。

盗用事件があるとは誰も知らない頃の話に次のようなものがあった。

『繡像小説』掲載分(山中の対話がない)とのちの単行本(山中の対話がある)には違いがある。このことに注意を向けた人がいた。実際には多くの人が知っていたのかもしれない。ただ文章に残っているのは1935年のことだ。大要以下のとおり。

疑問を出したのは趙景深「老残遊記及其二集」である。彼の父親が『繡像小説』からの抽印本を見せて、出まわっている単行本と内容が異な

るといったという。第11回の「山中の対話」にかかわる。「老残遊記」は『天津日日新聞』で発表されたというが、それでは同時に『繡像小説』にも発表されたのか。今、手元に『繡像小説』抽印本がない。阿英は『繡像小説』を所蔵していると聞いている。調べてもらえないか<sup>\*71</sup>。

当時は「老残遊記」の執筆発表過程が一般にはまったく知られていないことがわかる。

『繡像小説』、『天津日日新聞』、単行本が並べられているだけ。時間的な順序すら不明である。ましてやそれが盗用事件にむすびついていとは誰ひとり想像もしない。

阿英が回答したのは趙景深の文章から6年後のことだ。彼はすでに発表されていた劉大紳の「關於老残遊記」(1939)を読んでいた。

阿英は『繡像小説』と単行本の東亜図書館本(1925)を比較対照した。その結論は『繡像小説』第9-18期<sup>\*72</sup>に掲載されたものには東亜図書館本に見える第11回はまったく収録されていないという事実だった。没書の実事を知ってはいた。しかし阿英は「当然あとからつけ加えたものだ(当係後來所加)」(479頁)と断定している<sup>\*73</sup>。

第11回はあとから追加したと考えたところから次がわかる。すなわち劉鉄雲が没書にされたもとの原稿を復元したという発想をもとからもたない。

前出の劉大紳「關於老残遊記」が説明する。

作品の初出は『繡像小説』だ。連載途中で没書事件があり中断する。『天津日日新聞』に再度掲載し完結した(ただし新聞掲載は没書になった部分からと誤解している)。そこまでの説明は、比較的詳細だ。ところが盗用事件は別である。触れない。大紳はその事実を知らなかった。 罫

### 【注】

69) 樽本「李伯元の肺病宣言——『繡像小説』発行遅延に関連して」『清末小説から』第69号2003.4.1、

1-13頁。要旨：李伯元の死因は肺結核であることは定説になっている。主として友人の証言による。李伯元自身が、光緒三十二年二月十五日付『世界繁華報』に広告文を掲載し、みずからが肺病であること、招宴を断わる宣言をしている事実を発見した。新出資料である。李伯元が肺病であったことの確証となるばかりか、『繡像小説』の刊行が遅れていた事実と関連するからさらに資料的価値がます。すなわち李伯元の肺病は、彼の死因となっておりと同時に『繡像小説』の恒常的発行遅延の原因だということになるからだ。だからこそ『繡像小説』は刊行が遅れがちだったのだ。刊年を記載しなくなる理由でもあっただろう。彼が原稿を書きためていたとは考えにくい。それほど精力は残っていなかった。「文明小史」の最後部分は別の人物すなわち協力者であった欧陽鉅源が続作したと考えざるをえない。

- 70) 樽本「「老残遊記」と「文明小史」の盗用関係を論じる」『中国文芸研究会会報』第57号1986.1.30、1-4頁。要旨：「老残遊記」と「文明小史」の盗用関係というのは、以前は劉鉄雲と李伯元のそれであった。ところが李伯元死後も「文明小史」が書かれていたことが判明し、それでは「文明小史」の作者は誰かという問題が出現する。李伯元の交遊を考えると、それは欧陽鉅源以外には見当たらないことを言う。

樽本「李伯元と劉鉄雲の盗用関係2」『呻唾彙報』第11号1986.6.25、4-5頁。要旨：李伯元の死去後も『繡像小説』が発行されていたとすれば「文明小史」は欧陽鉅源によって書き継がれていたことになる。「老残遊記」から文章を盗用して「文明小史」に取り込んだのは欧陽鉅源だったといえる。総合すれば南亭亭長という筆名は李伯元と欧陽鉅源の共同筆名であったと考えるのが妥当だろう。

樽本「『繡像小説』研究の現在」『清末小説から』第89号2008.4.1、1-8頁。要旨：『繡像小説』にはみつつの問題がある。編者は誰か、また李伯元と劉鉄雲の盗用事件、および発行遅延問題である。私は問題点3件について独自の解答を提出している。だが中国ではそれらについて長らく放置

したまま追跡調査を行っていない。ようやく文迎霞「關於《繡像小説》的刊行、停刊和編者」（『華東師範大学学報（哲学社会科学版）』第38卷第3期2006.5.15）が公表された。編者問題については、李伯元であることを新聞の広告を示して確認している。新聞を資料として利用するという私の方法を援用すれば同じ結論に到着するのは当然だ。おなじく発行遅延についても新聞広告を根拠にして私の解答に近い。ただしより緻密な推測を提示する。それは、よい。残念なことに発行遅延から必然的に生じる盗用事件については、言及をしていない。文迎霞の今後の論考を期待する理由である。

- 71) 趙景深「老残遊記及其二集」『新小説』第2巻第1期通号第6期 1935.7.15/『小説閑話』上海・北新書局1937.1.258-259頁/『中国小説叢考』濟南・齊魯書社1980.10
- 72) 第9期を一九〇三年八月初一日と新曆旧曆混用で示すのはよい。だが第18期になぜか同年十二月ツ六日という日にちをあてて間違ふ。意味不明。阿英は『繡像小説』の発行遅延を知らなかった。定期を守っていたと考えていた。だから第18期の発行は同年十二月十五日だと書きたくて偶然に誤記したのだろう。どのみち原本に発行年月日は記述されていないのだ。刊年不記と書くべきだった。
- 73) 魏如晦（阿英）「老残遊記校勘記」『文林月刊』第6期1941.11/阿英『小説四談』上海古籍出版社1981.12

【2019.5.9改訂しました】

次号の公開は2019年4月1日を予定しています  
清末小説研究会 <http://shinmatsu.main.jp>

## 自爆する日中の研究者たち 3完 ——清末小説と林訳をめぐって

樽本照雄

### 4 陳大康のばあい

陳大康(1948-)の『中国近代小説編年史』全6冊(北京・人民文学出版社2014。『編年史』と称す)は、1840-1911年を対象とした「超」のつく大型小説年表だ。清末小説についてこれほど大規模な小説年表は見たことがない。

該書にはその前に準備段階がある。『中国近代小説編年』(上海・華東師範大学出版社2002。『編年』と称す)という。各種先行論文を参照して簡便な1冊(本文は303頁)にまとめた。この段階において新聞は資料に使用してはいない。その後、陳大康は『新聞報』『民呼日報』『民呼日報』『民立報』などに掲載された小説関係部分を丹念に採取し年表形式で個別に発表した。『繡像小説』の刊行についても新聞広告を利用して記述する。それらの調査は私の知るかぎり2006-2010年に集中している。その作業を経て大部で詳細な上記『編年史』全6冊(本文2,342頁)の出現となった。

新聞、雑誌、単行本をほぼ網羅する。しかもアメリカほかの外国で刊行された漢語新聞を収録しているのが貴重だ。中国で最初の小説専門雑誌『新小説』が日本で刊行されたことを考えれば当然の処置である。そうして全6冊という空前の規模になった。『編年』もそうだったが

日にちまで明示しているのがよい。

『編年史』に掲げられた「序」に説明がある。近代小説研究の手始めに先行論文を再構成して『編年』を作った(1頁)。近代小説の発展状況を把握するのが目的だったという。私が『編年史』の前段階だという理由だ。

『編年史』は言うまでもなく作品の新聞、雑誌の連載状況および単行本など実物で確認する作業は当然のように実践されている。それでも見ることができない単行本が200種ばかりあるという(凡例2頁)。さらに詳しい状況を知るために陳大康が採用した方法が、上に述べたように主として新聞記事と広告を対象に小説作品の関連文章を収集することだった。

清末に出現した新しい形態の新聞雑誌には研究するうえでの資料的価値がある。作品の内容と刊行について参照するのに有効だ。それは『繡像小説』の刊行を追跡した1980年代からすでにわかっていた。しかし清末小説全般について多くの新聞雑誌を追及することは時代の制約があった。しかもひとりの力ではむづかしい。好都合なことに図書館ほかでの資料整理が整ったようだ。そこで陳大康の指導を受ける学生たちが資料採集に動員されたのだろう。華東師範大学の博士課程学生など関係者19名の名前が掲げられている(8頁)。

新聞雑誌の採取範囲を広げ各人で分担したらしい。そうでなければこれだけ大部でしかも詳細な年表を作成することはできなかったと思う。大きな成果をあげたと高く評価できる。

王鑫は作業に参加したひとりだ。仲間とともに中国各地の図書館を訪問して資料を精査したと説明する(「後記」『晚清標『新』小説論稿』北京・中国社会科学出版社2017。383頁)。

編集作業に参加した人々のなかには、担当した新聞雑誌にもとづいて独自の研究成果を公表した人もいる。研究の鉅脈が新聞雑誌に潜んでいたのを掘り当てた。

年表の具体的な成果の一部分は「序」におい

て陳大康自らが簡潔に紹介している。

『繡像小説』の発行遅延を(私に言わせれば遅ればせながら)認めた(2頁)。海賊版『官場現形記』の裁判を新聞広告で追跡した(2頁、後述)。「域外小説集」を受贈したという『神州日報』などの記事を見つけた(2頁)。「中国天涯芳草館主海陽吳禱中」という署名を発掘した(4頁)。いずれもがその時々で討論されたものだ(『域外小説集』を除く)。それらを問題にした先行論文がある。だが陳大康は文章名などについて具体的に記さない。参考文献の明示がないから不明だ。しかし陳大康はすでに公表された論文によって論議の概要を承知していると理解する。

『繡像小説』発行遅延について一言のべる。

陳大康は新聞広告を資料にして刊年を記載しない該誌の発行年月を推測した。それが『編年史』に反映されている。そこまではよろしい。ところが発行遅延の事実は広く研究者の認知するところとはなっていない。

私がやや意外に感じるのは前述の王鑫である。王鑫は『編年史』の資料収集作業に参加しているにもかかわらず『繡像小説』の発行遅延に気づいていないのだ。王鑫は「学究新談」について「《繡像小説》<sup>ママ</sup>三月第四十七期開始連載」(321頁)と架空の数字を従来通りに記入して誤る。指導教授の陳大康が「十二月」と推測していることを知らないらしい。情報の共有がなされているとはいいたい。

任冬梅「中国科幻星際旅行的最初夢想——論荒江釣叟的《月球殖民地小説》及其時空觀」(姚文賢、王衛英主編『百年中国科幻小説精品賞析』第1冊 北京・科学普及出版社2017所収)がある。

「月球殖民地小説」の『繡像小説』掲載を「1904年21-24期、26-40期、1905年42期、59-62期(1904.3-1905.11)」(39頁注1)と誤る。また該書所収の姚海軍「中国長篇科幻小説輯録」も「月球殖民地小説」を説明して『繡像小説』

の期数不記で1904-1905年と誤る[百幻⑤1872]。いうまでもなく『繡像小説』第21期を含めて刊年の表示はないのだ。

こういう部分を指摘すれば、著者たちは(必ずといっていいくらい)それと作品論は関係がないというに決まっている。裴效維の昔とたぶん同じだろう。基礎細部は確実に把握したうえで作品を論じる必要がある。私がそうくり返しても理解しないのが目に見える。

劉蘭肖『中国期刊史 第一卷(1815-1911)』(葉建と共同執筆。石峰主編 北京・人民出版社2017)がある。

李伯元が死去したため『繡像小説』が停刊したと説明する。阿英の断定(『晚清文藝報刊述略』)を明らかに継承している。阿英と劉蘭肖の文章を引用する。

阿英 至丙午(一九〇六), 因伯元逝世休刊, 共行七十二期。17頁

劉蘭肖 1906年4月因李伯元逝世而停刊, 共出72期。218頁

劉蘭肖は阿英に従っているから表現が似るのだろう。不思議ではない。

ついでに言う。商務印書館と日本の金港堂が合弁した事実が書かれていない(葉建執筆。338頁)。『中国期刊史』と称しながら重要な事項を落としているのは残念なことだ。

『繡像小説』終刊と主編李伯元の死去を結びつける。事実ではないこの俗論はいまだに引き続き続けている。陳大康がせっかく『編年史』で発行遅延を後追い確認した成果が無視される。これが大勢だ。学界の権威である阿英による誤った断定が原因である。

前述のように陳大康が『繡像小説』の発行遅延を認めたのはいい。ただし小規模な自爆を見かける。李伯元死去後も彼の筆名を使用した作品が発表されている事実については言及がない。またそれに関して『編年史』には前著『編年』

の記述を再利用して前後のつじつまが合わなくなった箇所がある。

商務印書館「説部叢書」は海外小説の翻訳シリーズとしてよく知られている。長期間にわたって300種以上という多数の作品を刊行した。途中で叢書の構成が変更になり表紙の意匠も更新されている。主たる変更は元版全十集から名称を「初集」全100編へと改称統合したことだ。初集への変化は中華民国以後に生じた。ゆえに『編年史』が対象とする清末時期に「説部叢書」の初集は存在しない。また林紓の翻訳だけを集めた「林訳小説叢書」も民国後の刊行だ。ところが陳大康はそれらの多くについて区別をつけることができている。清末には存在していない初集と「林訳小説叢書」の名称を説明することなく使用する。知識の不足が露呈している。翻訳作品の原作、原作者名を注記しないのは阿英目録と同じ。説明する必要がないと考えているのだろうか。原作を明記しないからとんでもない誤りを犯すことになる(後述)。

ここで『編年史』から少し離れる。

呉趺人が深く関与している「電術奇談」は有名だ。日本作品を底本とした翻訳である。梁啓超が日本で創刊した中国最初の小説専門雑誌『新小説』に連載された(1903-刊年不記)。のちに広智書局から単行本が出た(1905)。広智書局は重版しそれ以外の出版社も刊行している。のちには映画になった。中国では大いに歓迎された翻訳作品だということができる。

表示される関係者の名前は複数だ。「(日)菊池幽芳氏原著、方慶周訳述、我仏山人(呉趺人)衍義、知新主人(周桂笙)評点」と4名の名前が並べてある。

菊池幽芳の原作を方慶周が文言で6回に漢訳した。それにもとづいて我仏山人すなわち呉趺人が白話で24回に書き換えたと言明される(総評)。

もとの漢訳は6回で呉趺人がそれを24回に書き換えた。くり返したのはこの記述が研究者の

判断に混乱を引き起こす主な原因になったからだ。はっきり言えば6回と24回という数字を人々は誤って解釈した。その誤解が生まれた理由は単純なものである。説明する。

私は当時不思議に思ったものだ。論じる研究者の誰ひとりとして菊池幽芳の原作を特定していない。底本が不明であるにもかかわらず回数多寡だけを問題にする。そこから導き出される結論は次のとおり。呉趺人が行なったことは翻訳にもとづいた「書き換え[衍義]」であってそれは創作あるいは再創作である。どうしてそうなるのか。

香港中文大学で開催された国際学会に参加したときのことだ。雑談中に「電術奇談」について外国の研究者が集まって討論したことを当事者から聞いた。6回の文言が24回の「俗話(口語のこと)」に膨れあがっていてどうしてこれが翻訳であろうかと疑問がでた。ならば呉趺人の創作に違いないとある研究者は発言した。誰もそれに反対しなかったようだ。

彼らは回数を比較しただけ。菊池幽芳の作品が何かを問題にしないところが根本的に怪しい。翻訳作品の研究はまず底本の特定からはじまる。その基本がおろそかにされている。

さかのぼれば「電術奇談」について呉趺人創作説を最初にと考えたのは、孫楷第『中国通俗小説書目』(北平・国立北平図書館1933)だと思われる。中華人民共和国成立後も再版されて同じ説明がある。すなわち「本書(電術奇談)は日本菊池幽芳の原著を底本にし書き換えたものですすでに翻訳という性質のものではない[此書以日本菊池幽芳原著為底本而敷衍之、已非翻譯性質]」(179頁)だ。

孫楷第は菊池幽芳の原著を見てそう説明しているわけではない。底本を知らずに翻訳ではない(再創作を意味する)という。それは上へのべた回数の6回から24回への変化を見て勝手に断定しているにすぎない。根拠はないのだ。1930年代に孫楷第がそう書いたのを後の研究

者は鵜呑みにした。自分で原作を探そうとはしなかった。

そういう状況だからか菊池幽芳の小説を特定したのは中国人ではなく日本人ということになった。1985年のことだ。その時まで底本を探究する研究者はいなかった。考えれば中国で日本語の底本を探究することは困難かもしれない。しかも中国学界では翻訳研究は軽視されていた。さらに日本学界では清末小説を研究する人は少なかった。呉趼人という著名な作家が関与しているにしても翻訳の底本探索にまで手が回らなかったということだろう。

菊池幽芳の原作が「新聞賣子」であることを突き止めるには手間がかかった。菊池幽芳は著名だが作品「新聞賣子」について言及されることはあまりない。『大阪毎日新聞』1897年の連載後、1900年に大阪駈々堂から単行本で刊行されている。英国原作(不詳)を日本語訳したものだという。ならば漢訳の「電術奇談」は重訳になる。

私は「電術奇談」と「新聞賣子」の本文を手元に置いて比較対照した。「電術奇談」は登場人物の名前だけを中国風に変更している。また削除と加筆がいくつかある。しかし小説の舞台は英国とフランスのままだ。基本的には日本語作品に忠実な漢訳であることがわかった。これは日本語の「新聞賣子」で確認した事実だ。では「6回から24回」の回数増加はどう考えるか。簡単なことだ。両者の1回の分量が同じだと思っただけから「6回から24回」へと4倍に増大したと誤解する。両者の1回分の字数そのものが異なっていると理解すれば問題はない。もとにした全6回の漢訳を24回に分割したにすぎない。

樽目録初版(1988)で底本「新聞賣子」を明記した。再創作が誤りだと注記したのは樽目録第2版(1997)からだ。そう説明するほうが利用者には親切だろうと判断した。

しかし中国の研究者は孫楷第説を信奉しつづけた。根拠もなく再創作だと説明した人々は次

のとおり。網羅していない。簡単にのべる。頭の数字は発表年を示している。略号は樽目録を参照してほしい。

1933孫楷第179頁/1945楊世驥[談往98]/1979盧叔度28頁/1984、1998馬祖毅/1985執筆者不記[補目54]

**【1985菊池幽芳「新聞賣子」の発見】**

1988王立言96頁/1989歐陽健、蕭相愷[歐蕭74]/1990趙明政[提要898]/1990歐陽健、蕭相愷[提要1279]/1993林薇[全書57]/1993蕭遙[歷近182]/1998裴效維校点『吳趼人全集』第5卷/1998趙明政[古大879]/1999王立言[通典551]/1999馬祖毅[祖毅711]

**【2002樽目録第3版にも注釈あり】**

2004韋鳳娟[目白48]/2007杜慧敏[慧敏89]/2009周紹良[紹良416]/2013孟松[偽訳33]

上は私が把握しているものだけにすぎない。誤解を述べている論文はほかにもあるだろう。

それにしても孫楷第を先頭にして上記の全員が間違っている。青色で示した菊池幽芳「新聞賣子」が判明したあとも間違いをくり返す。日本での研究情報は中国には伝わらないらしい。中国で刊行された**【2002樽目録第3版】**でも明記しているのだがそこは研究者の目にとまらないと見える。別に不思議なことではない。日本で清末小説が研究されているなど想像もしていないと思う。

例外は夏曉虹だ。1998年、夏曉虹が樽目録第2版を紹介して「近代小説知多少」(『読書』1998年第7期)を発表した。そこで樽本の「再創作説は誤り」に言及している。馬祖毅は呉趼人が方慶周の原訳にもとづき改編したと以前は書いていた(1984:291頁、1998:410頁)。それが変化して樽本説を紹介した(1999:712頁)。夏曉虹の文章を読んだからだ。

さて陳大康である。

闕文『晚清報刊上の翻訳小説』(済南・齊魯書社2013)の序として陳大康「翻訳小説在

近代中国的普及」がある。そこで「電術奇談」を説明して以下のとおり(注番号は省略する)。

この作品(「電術奇談」)はもとは方慶周の翻訳原稿であってすでに「翻訳」している。しかも呉趼人がそれを「書き直し」でその長さは6回から24回に急増した。……中略……「書き直し」とはわざと「翻訳の痕跡を拭い去る」ことを標榜するからこのような作品を翻訳ということはむづかしい。しかし創作というわけにもいかないから半分中国化した創作というのが妥当である。

此篇原是方慶周の訳稿，已是“訳述”了，可是呉趼人又将它“衍義”一番，篇幅從六回猛增至二十四回。……中略……“衍義”者有意以“翼免訳訳痕迹”為標榜，我們很難將這樣的作品稱為訳作，但也無法歸於自著，或稱其為半本土化的創作為恰当。(序2)

陳大康が指摘するのも回数激増だ。見た目の数字にすぎない。彼も方慶周と呉趼人の示す1回の分量が同じだと思込んでいる。回数増加にともない文字数が4倍になったと勝手に想像しているだけだ。その結論は半創作である。中国学界に從來からある考え方と同じだ。

陳大康は「電術奇談」の底本が何であるかを指摘していない。『編年』『編年史』また後の『中国近代小説史論』(北京・人民文学出版社2018)に原作の記述はないのだ。つまり菊池幽芳の「新聞賣子」を見ずに「半分中国化した創作[半本土化的創作]」と断言する。日本において事実がすでに明らかにされているがそれを知るための努力を放棄している。中国で見ることのできる樽目録第3版も眼中にはない。陳大康は從來から伝えられる誤解をここでもくり返している。昔と違って今は日本の国会図書館が所蔵する『新聞賣子』はウェブを利用して中

国で見ることが可能だ。それもしていない(陳大康は理科系出身だからウェブ利用はお手の物だろう)。研究者として責任のある記述ではないと考える。年表に原作を明記する気がないからこういう誤りが生じる。

陳大康が実行した最も大きな自爆は海賊版『官場現形記』についてのものだ。海賊版作製の主犯は日本東京の金港堂であると断言した。さらに日本と日本人を非難した。根拠はなにかといえば、それが存在しない。証拠もなく主張するから虚偽である。

そこにいたるまでの前段階がある。さかのぼって簡単に説明する。

劉穎慧が新聞を探究して海賊版裁判の概要を明らかにしたのははじまりだ。新聞広告を見れば海賊版を作製販売したのは日本人である。陳大康はそれとほぼ同じ材料を使用して自分の感じる不満を述べた。犯人は日本人であるにもかかわらず裁判の途中で日本人の姿が消失したことについて納得がいかないという。挙句の果てに金港堂主犯説を独自に提出した。おおよそはそういう流れだ。

以下に少し詳しくのべる。

それまで海賊版『官場現形記』の裁判があったことは『中外日報』に報道されたところまでわかっていた(『李伯元研究資料』106頁)。ただし年月日までは書かれていない。何時のことか不明だった。劉穎慧は新聞の出版広告に注目し裁判が行なわれた時期を1904年に特定した(劉穎慧「李伯元《官場現形記》版權訴訟始末」『華東師範大学学報(哲学社会科学版)』2006年第3期)。新発見である。すばらしい。私は躊躇せず劉論文を高く評価する。

新聞広告を出したのは「日商朝日洋行」だ。日本東京で印刷した吉田太郎著『官場現形記』(1904)を中国に輸送し「知新社」の名義で販売する。知新社は洋装であることを売り文句にした。元版が活版線装本であるのと区別したのだ。東京金港堂と業務提携しているという。



知新社の責任者は日本人「弼本氏」であり中国人の席粹甫が支配人だと広告に明記した。著者の李伯元を偽名の吉田太郎に置き換えて海賊版全体が日本色で塗り固めてある。

新聞広告を追跡して劉穎慧はそこまで明らかにした。日本と日本人が前面に出てくる。広告だけを見れば、日本人が中国人李伯元の著作について海賊版を作製販売したことになる。

それにしても日本人の名前に「弼本氏」はなさそうに思う。しかも自社広告に責任者の名前を出すのも日本の習慣にはなじまない。加えて自分の名前に「氏」をつけることはありえない。劉穎慧はそれらが不審だとは感じなかった。説明がないところからそう考える。ただし資料の紹介に徹して余計な推測を加えなかったところがよい。研究態度としてはこれが正しい。

いうとすれば劉穎慧が目にしたのは広告に限られたことだ。それだけでは不十分である。裁判だから判決が下されたときに一般ニュースとして報道されたのではないか。不足していたのはそう想像する力だった。真相にあと一步のところまで迫っていた。惜しかったと思う。だがいってみればそこは陳大康教授が指導すべき部分だろう。それはなかった。陳大康自身が思いつきもしなかったからだ(後述)。

私は新聞のマイクロフィルムを入手して自分で調べなおした。劉穎慧論文には言及のない広告ひとつと裁判報道を複数見つけた。後者は裁判の内容を知るための最重要記事である。

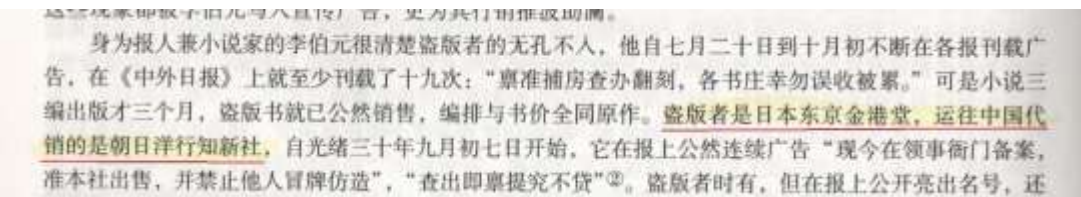
ひとつ。新しく発掘した知新社広告は『中外日報』光緒三十年九月初七日(1904.10.15)の掲載だ。ふたつ。裁判報道は光緒三十年十月十六日(1904.11.22)付の『中外日報』『同文滙報』『時報』である。

複数の新聞に見つけた裁判報道記事は、強調しておくがきわめて重要な意味をもつ。新聞広告だけでは把握できない事件の真相を明らかにしているからだ。すなわち中国人「席粹甫が日本人の名前を騙って[席粹甫冒日本人(之)名]」と明記している(樽本「官場現形記」裁判の真相——日本を装った海賊版『清末小説から』第90号2008)。海賊版作製販売はすべて席粹甫の自作自演であった。海賊版事件について日本人はもともと無関係なのだ。

私の論文公表から6年後に陳大康は『編年史』の「導言：過渡形態的近代小説」において海賊版裁判に言及している。

陳大康が使用した新聞広告は劉穎慧が引用したものと重複する。ただし劉穎慧が示さなかった広告を1件示した。それはその6年前に私が見つけた『中外日報』光緒三十年九月初七日(1904.10.15)の広告だ。偶然の一致だと思う。陳大康は樽本論文を読んでいないだろう。そう考えるのは陳大康が裁判結果についての新聞記事があることに言及しないからだ。あくまでも広告をつなぎ合わせて想像妄想するだけ。陳大康は広告のみによって知った裁判の結果に不満を述べた。李伯元が裁判に勝利したものの日本人「弼本氏」が罰せられず中国人席粹甫ひとりだけが首かせ三日の刑に処されたのは「いくらかふがないものである[有点窩囊]」(152頁)と重ねて書いている。「いささか悔しく思う」と訳してもいい。

私は裁判記事を見て事件の真相を知っている。犯人は日本人ではない。中国人なのだ。ところが陳大康は日本人が処罰されなかったのは不公平だと述べる。彼の不平不満はおかしな感想だと思った。事実ではなく的外れだからである。



陳大康は事件の真相を知らない、あるいは知ろうとしない。樽本論文が発表された後も陳大康は暴走を続けたということだ。

調査不足から生まれた思い——「ふがいないものである」と不満を述べるだけだったのがその後急変する。あろうことか海賊版作製の主犯は東京金港堂だ〔盗版者は日本東京金港堂〕と主張したのである(陳大康「論近代小説伝播中の盗版問題」『文学遺産』2015年第1期。166頁。写真参照)。

犯人の席粹甫が出した広告に日本東京金港堂が見える部分を陳大康はつかまえた。根拠はそれだけのようだ。金港堂と席粹甫がつながっている具体的な証拠を提出していない。ゆえに陳大康の主張は妄想に捏造したものだといわざるをえない。裁判結果について不満を表明するだけであれば研究の範疇内にкаろうじて踏みとどまっていたといえる。しかし金港堂主犯説は捏造だから妄想の暗闇世界に跳びこんでいったことになる。言ってみれば陳大康は異次元の世界に身を翻した。陳大康はどうしても日本の金港堂を犯人にしたかった。その理由を私は知らない。

くり返す。金港堂が主犯である証拠を陳大康は提出していない。名前を出された金港堂は被害者であるとは陳大康はまったく思わなかった。

犯人の席粹甫が勝手に金港堂の名前を利用しただけのことだ。これが事実である。自分のでっちあげた知新社がいかにも日本の会社であるように印象づけるためだった。犯人席粹甫が出した広告を全面的に信用してどうするのか。証拠にはならない。陳大康はより多くの資料収集とその吟味という研究の基本手順を忘れていた。

陳大康が金港堂主犯説を提出したことによりある事実が水面下から出現した。当時の上海の出版状況について彼は知識を持っていないことだ。

鍵語は李伯元、『官場現形記』、海賊版、『繡像小説』、商務印書館および金港堂である。

これらが緊密に組み合わさっている。それを把握していないから金港堂が犯人だとする見当違いな主張を出してくる。

李伯元作「官場現形記」は彼の主宰する上海の『世界繁華報』に連載していた。はじめの12回を初編として単行本化する。各編12回の全五編だから60回になる。この初編12回だけに基づいて席粹甫が吉田太郎著と称する海賊版を作製販売した。1904年のことだ。李伯元の新聞連載はまだ継続中である。

ひとこという。奇妙なことがある。劉穎慧も陳大康も海賊版を論文の主題にしながら海賊版そのものについては説明しない。見ていないらしい。陳大康『編年』123頁、『編年史』736頁には該書の記載がないのだ。中国ではすでに入手しにくい部類の書籍になっているのだろうか。

海賊版が出現した当時の出版界にもどる。

商務印書館の張元済に招聘された李伯元は「官場現形記」を書くかわら1903年に創刊された『繡像小説』の主編をつとめた。該誌にも「文明小史」「活地獄」などを連載している。

1903年に商務印書館は日本の金港堂と正式な合弁会社になった。1903年から1914年までの実質10年間は商務印書館の合弁時代だ。清末には異民族(満洲族)支配からの脱却を強く要求する政治的動きがある。だからこそ商務印書館は日本の出版社との合弁を隠蔽したかったとわかる。中華民国成立後に創業した中華書局からそこを攻撃されたのが合弁解消の理由だった。中華人民共和国成立後の学界でも合弁問題については反応と評価が揺れ動く。日本と中国の政治的関係が影響を及ぼしているらしい。中国学界あるいは商務印書館はその時々政治的動きによって日中両社の合弁を認めたり無視したりといったもの状態だ。だから合弁の事実を知る研究者は少数にとどまるだろう。日本で商務印書館を主題とした専門書が刊行されていることにも気づくはずがない。

論近代小説傳播中の盜版問題

兩本氏”<sup>①</sup>，即日商亲自出面表明主角身份，言下之意是該找我論理，怎么却与我的代理人打官司？  
 这正是日本人的狡猾之处，因为起诉兩本氏，按不平等条约中的領事裁判权，案件应由日本領事  
 审理，这意味着李伯元的官司必输无疑。李伯元之所以向会审公堂报案，而且是以“經理人席粹甫”  
 为被告，目的也正是不让裁判权落入日本領事手中，何况租界当局曾批准过李伯元保护版权的申请。  
 就在兩本氏刊載廣告的當日，即光緒三十年十月十五日，会审公堂拘提抗傳不到席粹甫，李伯元終  
 于贏得了这场官司。第二日，李伯元不惜工本用大字在《新聞報》、《時報》、《中外日報》等大報刊載

商務印書館、金港堂および李伯元は結びついている。その金港堂がなぜ同一集団にいる李伯元の著作を盗んで刊行する必要があるのだろうか。陳大康が主張する金港堂主犯説の奇妙なところは、まさに全体の事実関係を無視しているからだ。だいいち証拠資料を提出していない。捏造だというほかないだろう。

重要だからなん度でも言う。「海賊版作製の主犯が金港堂であると主張するならば、その証拠を提出する義務と責任が陳大康にはある」

陳大康論文を読んでどうしてそういうことを書くのかと不審に思う箇所がある。海賊版裁判の途中で日本人の姿が消失した。犯行に日本人は関係していないから当然だ。ところが陳大康はそれを説明する過程で「これこそが日本人の狡猾なところで[这正是日本人的狡猾之处]」(167頁。写真参照)などと述べて日本と日本人を貶めて中傷するのだ。これこそ妄想にもとづく根拠のない誹謗そのものだ。陳大康が研究者としての道を踏み外し暗黒世界に飛びこんで自爆したと私がいう理由でもある。

『官場現形記』海賊版について陳大康は『編年史』(2014)を経て『文学遺産』(2015)を書いた。その結果、自ら進んで研究圏外に身を投じてしまった。

その後に出た陳大康『中国近代小説史論』(2018)を見る。日本と日本人を批判する姿勢を堅持して投身を続けているのだろうか。

該書「第11章 小説盜版与市場漸趨有序」の「第3節 官方開始介入反盜版」に言及がある(430-432頁)。驚いたことに金港堂主犯説もなければ日本人を貶めて中傷する文章もない。

きれいさっぱり消去して記述は『編年史』(2014)の昔にもどっている。私が何度も「その証拠を提出する義務と責任が陳大康にはある」と書いたのを陳大康は読んだのだろうか。その可能性は低い。前述のように私の論文(2008)には新聞の裁判記事を写真で示し文章を引用して示している。それについて陳大康は2014年、2015年と2018年の3回ともに言及していないからだ。別の箇所では海賊版裁判の全貌は広告に露出していると述べるだけ(500頁)。やはり裁判記事の存在を知らない。また日本において陳大康説への批判があるということすら認識していないだろう。

以前には明記していた日本と日本人を非難する言説を2018年には抹消した。しかし取り消した理由の説明がない。だから批判を受け入れて自分の非を認めたとは考えられない。意見を修正するために反日部分を取り下げたわけでもない。わかるのはただ消したことだけ。陳大康の文章が4年前になぜ後戻りするのかわからない。

結局のところ2015年に金港堂主犯説を捏造し同時に反日文章を公表した事実が残る。陳大康には致命傷であった。

以上、阿英、魏紹昌、汪家溶、陳大康たちについて見てきた。彼らは中国学界において最高最善最良にして最先端に行くもっとも優秀な研究者のはずだ(った)。それがこのように自爆している。事実の認定に関して彼らに正確さを求めることはできないのだろうか。日本にいる私が吃驚するのは当然だろう。

## 5 瀬戸博士のばあい

やってもいないのにやったことにされる。冤罪とは無実の罪を着せられることだ。濡れ衣ともいう。あらためて書くまでもない。これは常識だ。

200種以上の外国小説を漢訳したことで著名な林紓である。ところがある日突然、文芸について無知で区別がつかないから「戯曲を小説にかえて翻訳した」と批判された。ひとことでいえば原作のシェイクスピア作品(莎劇)を小説形式にかえて翻訳したということだ。「戯曲と小説の区別がつかない」ほど無知だと酷評された。その逆すなわち小説を戯曲になおして漢訳したというわけではない(文明戯で後述)。

「区別がつかない論」は研究者全員が林紓を非難し嘲笑する大きな理由のひとつとなっている。林紓批判時に使われるいわば常套句である。

林紓が最初に濡れ衣を着せられた時、材料に使われたのは彼と魏易の共訳『吟辺燕語』(商務印書館1904)である。莎士比(シェイクスピア)著とだけ示してラムの名前はない。書名はそう省略して示すのが習慣だ。本来の題名は『英国詩人吟辺燕語』という。

阿英の項目ですでに説明した。「英国詩人」はシェイクスピアを指す。「吟辺」は戯劇(戯曲)だし「燕語」は物語だ。『シェイクスピア戯劇物語』である。ラム本の題名『シェイクスピア物語 TALES FROM SHAKESPEARE』を直訳した。ラム名がなくてもこの漢訳題名を見るだけで中国の知識人は底本がラム本であることを理解したのは確実だ。「漢文釈義」がついた英文ラム本が商務印書館(1910)より発行されていた。拉穆著、甘永龍注『莎氏樂府本事』である。ラム本の存在は周知のことだった。1904年初版から1918年の王敬軒(錢玄同)と劉半農による「なれあいの手紙」まで14年間、『吟辺燕語』については誰も異議をととなえていない。ラム名がないといって林紓を批判

した知識人はいない。莎士比だけを出してラムの名前がないから林紓は嘘をついているという人がいたら、その人は知識常識がないとかえって嘲笑されただろう。そこをあえて虚偽だと主張する人物は別の意図を持っている(後述)。

『吟辺燕語』という書名のほかに林「序」を読めば、林紓が莎劇とラム本を区別していることが分かる。「区別がつかない」と主張する人はその考えを頭の中であらかじめ決めていた。色眼鏡をかけて見るから林序のあるがままを読むことができない。

林序に見える莎氏とラムの関連語句を次にまとめる。すでに指摘しているが瀬戸博士を含んで注目する人はいない。

詩家之莎士比 戯曲家のシェイクスピア

(詩人の莎氏。「詩家」は詩人。のちにいう劇作家のこと)

莎氏之詩 シェイクスピアの戯曲

(莎劇。「詩」は戯曲を指す)

莎士比筆記 『シェイクスピア物語』

莎詩之記事 『シェイクスピア物語』

(「莎詩」は莎劇を「記事」は物語を意味する)

莎詩紀事 『シェイクスピア物語』

(「莎詩」は莎劇を「紀事」は物語を意味する)

語句に変化をもたせるのは文学作品の序であって学術論文ではないからだ。林紓は莎劇(莎詩)と小説のラム『シェイクスピア物語』を明確に区別していることがわかる。私が重ねて説明しているのは、林紓が原作者として出したのがラムではなくシェイクスピア(莎士比)だったからだ。ここを争点にした人々がいる。

「豆と麦の区別もつかない(不辨菽麦)」と主張し林紓を批判したのは、王敬軒(錢玄同)と組んで一芝居を演じた劉半農だ。その直後に北京大学同僚の胡適が出てきて追認する。林紓の死後は鄭振鐸が批判を決定づけ阿英が強調した。当時の北京大学教授を先頭にして錚々たる

人物たちが全員で老人林紘ひとりを集中的に長期間にわたって批判非難したのだった。

それ以来、研究者のほとんど全員が林紘について「戯曲と小説の区別がつかない」と思い込んでいる。1918年から数えて約90年間その解釈以外は存在しなかった。各人にその思考が定着したのも不思議ではない。ゆえに他人の先入観を自分のものにして林序文章の上面をながめるだけ。そこに何が書かれているのかを自分の目で確認しなかった。あるいは確認したつもりで誤読した。

別の言いかたをすればこうだ。研究者の誰でもが既存の「区別がつかない論」を林序に押し当てる。結論を先行させるから順序が逆である。ゆえに林紘が区別していることを正しく読み取ることができない。調べてみれば世界中の研究者全員がそうだった。例外がないことに驚いたものだ。なによりも底本にしたラム本は小説なのだからそれを漢訳して小説になるのは当然ではないか。

錢玄同と劉半農および胡適ら文学革命派が証拠としたのは、林訳にラム名がなく莎氏の名前があるその事実だけだった。それまで知識人の誰ひとりとして問題視しなかった箇所だ。問題になるはずのない部分である。しかし北京大学教授複数で構成される文学革命派はそのみをつかみ問答無用で「戯曲と小説の区別がつかない」のが林紘だと主張した。彼ら（アメリカ留学帰りの胡適を含む）は底本がラム本であることを理解認知していながらそれを隠しておくにも出さず林紘を批判し罵倒した。私に言わせれば林訳批判は最初から間違っていた。林紘に対して実践した文学革命派による詐欺行為にほかならない。私以外の研究者はそう考えなかったのが実情らしい。

鄭振鐸のばあいも同様だが少し手がこんでいる。文章の基本は林訳批判だが追悼文を装った。

鄭振鐸は林紘追悼文（「林琴南先生」『小説月報』1924）において翻訳の原著者を列挙し

た。その中に奇妙な記述がある。そこを読んだ誰ひとりとして注目しなかった。言及した人がいないからそう考える。

「莎士比亜（W. Shakespeare）」とは別に「卻而司、蘭（Charles Lamb）」を掲げる。ここが興味深い。これこそが問題だと指摘した人はいない。鄭振鐸が普通に原作者名を列挙したと研究者たちは受け取った。注目すべきは林訳批判の始まりは『吟辺燕語』にラムの名前がなかったことだ。該書にラム名が明記されていないにもかかわらず鄭振鐸はなぜここでラムを出したのか。

ラム（蘭）名を使用した林訳作品はない（阿英目録で林訳に蘭姆を使用しているのは誤記であることを指摘しておいた）。ラム名がなく内容が該当するのは『吟辺燕語』のみである。ラム名が明示されていない『吟辺燕語』の底本がラム本であることを鄭振鐸も知っていた証拠だ。

ならば『吟辺燕語』を根拠にして錢玄同、劉半農、胡適たちが林紘批判を実行したのは論理的に成立しないと鄭振鐸は述べたか。林紘を擁護したのだろうか。それはない。完全に無視した。あくまでも林紘を批判する考えだけが彼の頭の中を占めていたと思われる。鄭振鐸が先行し阿英が追随した。林紘批判が事前に設定されている。これが文学革命派の採用した方法である。

鄭振鐸は別の林訳シェイクスピアと林訳イブセンには底本が存在することを知らずに林紘批判を力強く展開した。林紘にしてみれば濡れ衣を着せられた。鄭振鐸は林訳の底本について調べなかった。林紘批判が最初から設定されていたからその必要を感じなかったのだろう。

私が不思議に思うのは鄭振鐸から数えれば80年以上にわたって底本が存在するという事実気づいた研究者がいなかったことだ。皆無だから当然、瀬戸博士を含む。逆にいえばそれだけ鄭振鐸の呪縛が強かったということになる。精神的な縛りだから無視すればいいようなものそれから逃れることはできなかった。実際に出

現したのはそういう異様な状況だ。

直視すべきは次の事実である。林紓が翻訳したときに使用したのは、莎氏ではラム姉弟本(1807)とクイラー＝クーチ本(1899。以下Q本)だ。イプセンではドレイコット・M・デル本(1917。以下デル本)であった。

2007年にこの事実が明らかにされた。ところがその後も誤解は続いている。1例をあげる。前出宋韻声『中英翻訳文化交流史』(2017)は林訳に底本があるという事実を知らない。いまだに林紓が莎劇を小説に誤訳したと説明する(77頁)。鄭振鐸の名前を出さずに(無断借用)林訳の欠点を数え上げる(78頁)。錯誤が蔓延し保持されたままだ。

底本が小説だから翻訳して小説になった。「戯曲を小説にかえて翻訳した」というのは欺瞞捏造である。文学革命派が林紓を批判した理由そのものがもともと存在しない。林紓冤罪事件というのが真相だ。

瀬戸博士(宏。早稲田大学博士(文学)。2006年度日本演劇学会河竹賞受賞。1952-)の林訳シェイクスピアに関する立論は際だって異常かつ非常識なものである。なぜならQ本とデル本が特定されたことを知った以後も林紓の冤罪を否定するからだ。「林紓有罪はありまあす」と高らかに宣言し林紓批判を強化して保持推進しつづける。

冤罪を証明するどんな新しい証拠の発見があろうとも瀬戸博士にとって林紓批判は不動のものとして定着している。「樽本氏の「冤罪」説は出発から無理があるのである」(瀬戸宏『中国のシェイクスピア』松本工房2016。99頁。以下頁数は同書)と述べて林訳批判の歴史的経緯を無視する。単に知らないだけなのか。私は証拠を提出して林紓は冤罪だと言っている。ところが瀬戸博士は資料も出さずに冤罪ではないと否定する。Q本、デル本という冤罪の証拠があることを認めるが林紓は有罪であると主張する。矛盾しているとは感じないらしい。普通に

言って瀬戸博士の思考法を理解することはむづかしい。理解し支持する人は林紓有罪論者だけであろう。

瀬戸博士は中国学界に事大して林紓批判を維持する。その根拠をラム姉弟、Q(関連してデル)という底本の作者名がないところに置いていとも同じだ。底本作者の名前がない点を根拠にする。

瀬戸博士にとって林紓は冤罪ではなく有罪だから今までどおり非難糾弾されて当然、批判攻撃して当たり前ということになる。その点で従来の文学革命派と立場は基本的に同様だ。ただし林紓批判を続行するためには理由を言う必要がある。そこで林紓が意図的に底本の作者名を隠したことにした。林紓はわざと莎氏の名前だけを前面に押し出した、と。底本作者のラム、Q、デル名を記さないことが戯曲と小説の違いが理解できない証拠だとされるのは従来どおりだ。以前と違うのはそれが「鄭振鐸らの誤解、錯覚を引き起こす直接の原因になった」という因果関係を追加したことである(後述)。林紓は文学革命派を陥れ騙すためにわざと底本の著者名を出さなかった。そういう邪悪な意図が林紓にあったと瀬戸博士は認定している。そう説明する箇所を次に引用する。

林紓は戯曲と小説の本質的な違いが理解できず、依拠した底本の著者を記さず、これが鄭振鐸らの誤解、錯覚を引き起こす直接の原因になった。「林紓はシェイクスピアの戯曲を小説化して翻訳した」という通説が形成された主要な原因は、林紓自身にある。106-107頁

文学革命派が「戯曲を小説化して翻訳した」と「誤解、錯覚」をした直接の原因は林紓がラム名を記さなかったことだと書いている。「依拠した底本の著者を記さず」と説明する。「記さず」に力点を置いて林紓が別の意図をもって

積極的にそうしたといたいらしい。「通説が形成された主要な原因は、林紓自身にある」と明記している。林紓にすべての責任を押し付けた。

「誤解、錯覚」と記しているから瀬戸博士は「戯曲を小説化して翻訳した」という批判(「通説」)が誤りであったことは認めるわけだ。そこで論理が飛躍する。いままでは批判されて被害者であった林紓は、瀬戸博士の説明によって鄭振鐸らを騙した加害者になる。一方の加害者であった鄭振鐸らは即変身して被害者に成ります(喪失1。注:喪失については後述)。被害者は林紓に対してなにを言っても許される。瀬戸博士の奇妙な論調はまだ続く。

通説形成の原因を劉半農、胡適、鄭振鐸ら新文化運動活動家の「恣意的な断定」に求め、林紓は冤罪であったとすることは、歴史的な事実に合致しないだけでなく、鄭振鐸らに対する別の冤罪を形成することにつながると思われる。107頁

劉半農、胡適らがラム本であることを知りながら林紓を批判したことが瀬戸博士には「恣意的な断定」に思われるようだ。瀬戸博士はあくまでも「新文化運動活動家」を支持し擁護する。そのように説明することのほうが瀬戸博士による「恣意的な断定」である。

林紓が冤罪であるとするのは「鄭振鐸らに対する別の冤罪を形成する」。これは何か。

鄭振鐸らに対する冤罪とは、結局のところ彼らの林紓批判は事実にもとづいた正しい行為だったと認定することだ。これが瀬戸博士の主張である。林紓は従来から批判されているとおりに「戯曲を小説にかえて翻訳した」ということにならざるをえない。そうすると瀬戸博士自らがのべた「誤解、錯覚」と矛盾する。

鄭振鐸が林紓批判を決定づけた有名な文章「林琴南先生」から部分を引用する。

小説と戯曲は、性質がもとよりまったく異なっている。しかし、林氏は多くのとてもすばらしい脚本を小説に翻訳してしまった——多くの叙述を加え、多くの対話を削除し、原本とはまったく違う本に変えてしまったのだ[小説と戯曲、性質本大不同。但林先生却把許多的極好的劇本，訳成了小説——添進許多叙事，刪減了許多對話，簡直變成與原本完全不同的部書了]。

林氏はたぶん小説と戯曲の区別がそれほどわかっていなかったのだろう[林先生大約是不大明白小説と戯曲的分別的]

広く知られた鄭振鐸による林紓批判だ。注目は「脚本を小説に翻訳した、および「小説と戯曲の区別がそれほどわかっていなかった」である。銭玄同と劉半農、胡適から一直線につながる主張だ。これには根拠がないと私は指摘している。なぜなら底本にラム本とQ本、デル本があり「林序」を書いているからだ。鄭振鐸説が誤りであることを証明している。林紓は脚本を小説に翻訳していない。私が事実にもとづいて鄭振鐸の記述は間違いだと書くとそれが「別の冤罪」になると瀬戸博士はいう。あくまでも鄭振鐸の行なった林紓批判は正しいと瀬戸博士は主張している。誤りだ。

林紓が莎詩とラムを明確に区別していることは前述した。林紓が序において莎氏と『シェイクスピア物語』を書き分けているのが事実だ。瀬戸博士が述べる次の箇所を見てほしい。興味があふれる。

『吟辺燕語』序は「余今譯莎詩紀事」と『吟辺燕語』の原本がシェイクスピアの梗概であることを明記しており、劉半農がそれに気がつかなかったとは考えにくい。99頁

上記の部分には瀬戸博士の黒い意思と矛盾が凝縮して露出している。問題の核心は「シェイクスピアの梗概」にある。

2008年、私はある研究発表会の席上で林序の「莎詩紀事」は何を意味しているのかと瀬戸博士に直接質問したことがある。瀬戸博士は「シェイクスピアの梗概」であると答えた。その「シェイクスピアの梗概」とは何かとさらに問うたが瀬戸博士は同じ語句をくりかえしただけ。最後には答えず沈黙した。直接顔を合わせて議論にならず会話も成立しない。

莎氏自身が「シェイクスピアの梗概」を書いたわけではない。いうまでもないことだ。林訳のばあいはラム本である。だが瀬戸博士は書名『シェイクスピア物語』だとは最後まで言わなかった。そう回答すれば林紓が莎劇とラム本を区別していたことを認めることになると考えたらしい。「区別がつかない論」が崩壊しないように曖昧なままにしておきたかったと推測する(喪失2)。研究会において私が指摘した後も瀬戸博士は上に引用したように「シェイクスピアの梗概」と称して不明確な状態を維持したつもりだ。それでごまかせると思ったのだろうか。しかしその中身は『シェイクスピア物語』以外にはない。あいまいなままにごまかそうとしても事実はそうなのだ。

瀬戸博士は「樽本照雄氏との論争」(316頁)と書いているが私は首をかしげる。嘘である。同席する場において議論もできずになが「論争」だというのだろう。ましてや事実を認めずごまかそうとする人物とは「論争」になるわけがない。瀬戸博士はほころびた自分の意見を古びた蓄音機(「留声機器」陳独秀1919)そのままに勝手にまき散らしているだけだ。

瀬戸博士は上に引用した文章のなかで不思議で奇妙なことを述べている。「劉半農がそれに気がつかなかったとは考えにくい」。ここが重要だ。つまり劉半農は林訳の底本が「シェイク

スピアの梗概」すなわちラム本であることを知っていたと瀬戸博士自身が書いている。ほかならぬ瀬戸博士が「区別がつかない論」を否定しているのではないか。私が瀬戸博士に直接問うたときには白状しなかった。だがひとり語りで白している。これを語るに落ちるといふ。

劉半農は認識していて故意に林訳を批判した。ならば瀬戸博士のいう「恣意的な断定」であるわけがない。瀬戸博士の説明は論理的につじつまが合わずその場しのぎで支離滅裂である。

瀬戸博士が書くように『吟辺燕語』の原本がラム本であることを劉半農は知っていた。だから劉半農の林訳批判は基本的に成立しない。瀬戸博士はそう述べて林紓を擁護したのだろうか。それはない。鄭振鐸、阿英のばあいも同様だった。事実を無視して林訳批判を力づくで貫徹するのが文学革命派のやり方だ。瀬戸博士は鄭振鐸と阿英に追随して完全に一致している。

「林紓は冤罪であったとすることは、歴史的事実に合致しない」(107頁)とも瀬戸博士はいう。底本となったQ本、デル本があることは林紓が冤罪であったことを裏付ける。しかしこの事実は瀬戸博士の林紓批判に影響を及ぼさない。そこが異常だ。無罪の証拠があってもすべてまるでなかったかのようにふるまう。ここが非常識だというのだ。どうしても鄭振鐸らを擁護支持して林紓攻撃を続けたい瀬戸博士のかたい意志が示されている。

瀬戸博士による新しい説明(追加1)は次のとおり。林紓は「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介した」(96頁)。

97、101、107頁にも類似の文章を示して基本的に同じものだ。くり返しているところから瀬戸博士が強く主張したいことだとわかる。

林紓を批判攻撃するために瀬戸博士は「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介した」という語句を創出した。そう説明する研究者は瀬戸博士以外にはいない。



瀬戸博士が考え出した独自の表現である。

ここは注目すべき個所だ。検討する。

瀬戸博士がいう「シェイクスピア作品」とはなにを指すのか。いうまでもなくシェイクスピアの戯曲(莎劇)だ。「シェイクスピア作品ではないもの」とはラム本、Q本を意味する(イブセン作品であればデル本だ)。中身は小説である。ここまではいい。ところが後半の「シェイクスピア作品として紹介した」を接続するとおかしなことになる。瀬戸博士はその奇妙さに気づかないから自信満々に繰り返し提出したのだろう。

具体的な語句で全体を書き直す。すなわち林紓は「ラム本、Q本をシェイクスピアの戯曲だといって紹介した」。瀬戸博士の説明によると林紓はラム、Qの小説を莎劇そのものとして紹介したことになる。これは間違いだ。林紓が翻訳提出したのは小説である。戯曲の形式ではない。林紓は「莎士比(シェイクスピア)著」と書いた。だがラム本が莎劇だとは言っていない。林序で莎劇とラム本を峻別している。そのラム本という小説を戯曲すなわち「シェイクスピア作品として紹介した」ことは1度もないのだ。瀬戸博士が考え出した1文は林紓については事実無根である(喪失3)。嘘にもとづいた瀬戸博士の林訳批判は根底から無効だ。

小説を戯曲として紹介した。どこかで似たような表現を目にしたことがあると読者は感じられるだろう。

「原本が『シェイクスピア物語』だと誤解し〔誤原本為《沙氏筆記》〕」(『小説四談』244頁)と阿英は書いた。林紓はラム本を莎劇そのものだと誤解した。阿英はそう説明して林紓は無知だと中傷したのだ。その結果は阿英によると「シェイクスピア作『シェイクスピア物語』」になる。そういう思考の筋道は普通に考えてありえない。林紓は戯曲と小説の区別をつけているのが基本的事実だ。阿英の指摘するようにはならない。だから奇怪なものを作り出し

たと私は思う。阿英は捏造してまでも林紓を嘲笑し批判したかった。

瀬戸博士は阿英の手になる歪曲した解釈をなぞっているように見える。瀬戸博士にその意識があるのかどうかは知らない。結果として一致している。

「『シェイクスピア物語』をシェイクスピア劇として紹介した」。瀬戸博士が創出した1文は、阿英説の前後を入れ替えてそのままではないか。文学革命派が林訳を批判するという「戯曲を小説にかえて翻訳した」は林訳の実物(ラム本=小説)を上面だけながめればいかにもそれらしく見える。しかし瀬戸博士のいう「小説を戯曲として紹介した」は話の方向が反対だ。林訳には当てはまらない。林紓以外の別のところにある(後述)。林訳についてそう説明するのは正しくないとわかる。

林紓が莎劇とラム本を区別しているのは林序を読めば明白だ。小説を戯曲として紹介したのではない。小説を小説として翻訳紹介した。林訳が批判される理由はない。

瀬戸博士がせっかく創作した語句(追加1)は林紓に対して適用しようとするれば根本的に成立しない。阿英説と同じだ。虚偽を根拠にして林紓批判を強化保持している。林紓にあらたな濡れ衣を着せてしまった。まことに無責任で不可思議な瀬戸博士の思考と行動だ。

瀬戸博士の説明が成り立たないと指摘したから本稿は以上で終了してもいい。しかしここで終われば私にしてみれば書き足りない思いが残る。

私は資料にもとづき事実を追究してきて林紓事件の真相は冤罪であることを突き止めた。だが瀬戸博士は私の提出した冤罪の決定的証拠を軽視ないしは無視する。そればかりか文章をもてあそんで林紓に理由のない冤罪を積み増している。被害者である林紓を加害者に仕立て上げた。林紓を批判した加害者の文学革命派は瀬戸博士の手によって林紓に騙された被害者となる。文学革命派の林紓批判は正しいと根拠のないこ

とを頑固に主張する。証拠もないのに林紘は有罪だと日本と中国において大声で喚き続けているのが瀬戸博士だ。

どうやら瀬戸博士は林訳批判の本質を理解していないらしい。基本は林紘にまつわる人権問題なのだ。自分の発する中傷が林紘本人の人権を侵害し、今現在生活しているその子孫、関係者の心情を深く傷つけているという自覚が瀬戸博士にはない。想像力が枯渇していて無神経である。いくら日本にいたとはいえ中国の歴史的知識人をどこまで貶めれば満足するのか。無実の人物に濡れ衣を着せ糾弾し続ける瀬戸博士には研究者としての良心と羞恥心がないのだろうか。瀬戸博士の文章を読めば「ない」とせざるをえない。私は強い憤りを覚える。瀬戸博士の林紘批判に私は断固として反対する。

林紘にかぶせられた汚名を返上し彼の名誉を回復するためにもう少し続けたい。

瀬戸博士の創作した言辭(追加1)は林紘についていえば事実ではなく間違っていると再度確認しておく。

つぎに検討するのは前出の「鄭振鐸らの誤解、錯覚を引き起こす直接の原因になった」である。瀬戸博士が作り出したこの表現は追加2になる。

瀬戸博士によるこの批判的言辭が成立するためにはある前提が必要だ。「誤解、錯覚を引き起こす」のだから林紘による積極的主体的能動的な意識があることを認めなくては出てこない表現である。従来の表面的な「区別がつかない論」よりも林紘の心理の内側にまで一歩踏み込んでいることがわかる。

林紘は当時の読者、研究者を騙し欺き詐欺にかけるために底本で使用したラムとQの名前を意図的に隠蔽した。そういう林紘の特別な意図があったと瀬戸博士は考えているとせざるをえない。つまり林紘は詐欺師だと瀬戸博士は断定したということだ。そうでなければ「誤解、錯覚を引き起こす」という表現につながらない。ここで当然ながら疑問が生じる。林紘個人の心

理内にある意図意思はどのようにして確かめたのか。林紘の考えは文章のどこに表出しているのか。だが瀬戸博士は具体的な証拠を示してはいない。捏造したと私がいう理由だ。

瀬戸博士が独自に考え出した言辭(追加1と2)は林紘に関しては成立しがたい。不確かな林紘の心理を付加して瀬戸博士は林紘批判を強行継続する。論理的整合性を保持することには興味がないようだ。林紘に向けた悪意だけを露出させる。それは文学革命派の基本姿勢と直接つながっている。

林紘は強引に冤罪を背負わされた被害者だ。瀬戸博士はそれを正反対の加害者に入れ替え作り上げて決めつけた。私は「林紘を詐欺師に認定し林紘の名誉を毀損する瀬戸博士」だと指摘している。「林紘本人の人権を蹂躪する」と同じ意味だ。

何度でもくり返す。瀬戸博士は林紘について「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介した」という。これは表現が正確ではなく林訳についての説明としては論理的に破綻している。林紘に適用すれば根本から虚妄であり虚偽である。

一方の文学革命派は事実にもとづかない言辭を弄して林紘と林訳を中傷した。瀬戸博士が提出した語句は文学革命派に差しむけると互いに引きあって合致してしまう。無理なく適合する。「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介した」のは文学革命派の方だった。

文学革命派が虚偽に依拠した理由は林紘を何がなんでもとにかく批判したかったからだ。自分たちを圧迫する強力で巨大な敵の役割を林紘に押しつけたかったからだ。証拠の有無は問題ではなかった。

瀬戸博士の創作した言辭は博士が意図したものとは違って結果が逆転する。林紘を非難するつもりがその反対の文学革命派の正体を暴露してしまった。皮肉なことにそれを導き出したの

は瀬戸博士自身なのだ。

なぜ林訳と林紓は突然批判されることになったのか。魯迅と鄭振鐸の証言を踏まえて私の考えをあらためて述べる。五四以前の状況すなわち「歴史的事実」について重複させながら引用文風に説明する。

文学革命派こそがラム本、Q本という「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介した」(瀬戸博士説)張本人そのものだ。虚偽にもとづいて林訳批判を実行した。

林紓について「戯曲と小説の区別がつかない」「戯曲を小説にかえて翻訳した」と説明すること自体が事実とは異なる。林紓は両者を峻別している。戯曲を翻訳していない。小説を戯曲だと紹介したこともない。底本が小説だから漢訳して小説になっただけ。

林紓に濡れ衣をきせたのは文学革命派だ。彼らが林訳批判、林紓批判を唐突かつ強引に開始し推進したのには理由がある。そうする必要が彼らにはあった。白話を主張する文学革命派にとっての反対者つまり古文の擁護者が姿を見せない。彼らの前に立ちはだかりさえぎり脅迫する強力な敵対者が出てこなかったからだ。文学革命派が必要としていたのは打倒すべき対象そのものであり、それは守旧派を代表する巨大な存在でなくてはならなかった。だが弓を引き絞っているのに的となる強敵が存在しない。そこにあるのは無反応である。文学革命派は「寂しさ[寂寞]」(魯迅1923、鄭振鐸1935)を感じていた。

林訳『吟辺燕語』とほぼ同時期に同じラム本を漢訳した訳者不明『海外奇譚』が刊行されている。これも前面に押し出すのは「英国素士比亜著」である。林訳と同様だが文学革命派はこちらの漢訳は素通りした。

名前が不明で経歴もわからない。そういう人物では批判しても社会的な衝撃が生じないからだ。

切羽詰った彼らが突然かつ無理やり敵に指名したのが古文を使用した多数の翻訳小説でも特別に著名な林紓である。「当代文豪」の林紓を批判することが先に決定している。あとから理由づけに林訳が利用された。北京大学教授とその仲間を中心とした文学革命派は「区別がつかない論」が虚偽であることを承知していた。とぼけ顔で「区別がつかない論」を前面に掲げ理由にして躊躇せずに林紓を非難した。

突然、攻撃目標に据えられた林紓は被害者なのだ。批判される根拠が存在しない。林訳を批判する加害者側の文学革命派が弄した言辞は間違っている。ゆえに客観的に見れば林訳批判そのもののもともから成立するものではなかった。

林紓批判が現在まで成立しているように見えるのにはわけがある。中華民国から中華人民共和国の長い年月を経る期間、中国学界がそこにある事実を無視しながら文学革命派の主張を公認し支持維持して異論が出現することを容認しなかったからである。その結果、研究者のほぼ全員が中国学界の設定した批判構造を受け入れ追従して定説化に協力した。私はそれを「林紓を罵る快楽」と称している。研究者たちは上から与えられた枠組みについて少しの疑問も持たなかった。調査する、あるいは資料を新しく発掘するという発想がなかった。林紓は無罪ではないかと疑うこともない。

中国にもし方が一にも覚醒した研究者がいて林紓は冤罪だと気づいたとしよう。文章を公表する前にその人は中国学界に反逆する人物だと判定され烙印を押されただろう。私はそう考える。

林紓問題は林紓とその関係者に対する人

権侵害を許容する中国学界の実態と切り離すことができない。それを視野にいれて翻訳文学史上まれに見る冤罪事件だと私がいう理由である。

林紵だけが底本の作者名を出さなかったかのように瀬戸博士は印象操作をする。中国近代翻訳についての知識が欠落している。

底本の作者名を出さない例は清末民初時期の翻訳界では珍しいことではない。現在の基準を当時に押し付けても意味はないのだ。林紵に限らなかった。

林紵を批判した劉半農、胡適、魯迅、周作人らが発表した翻訳についても底本を示していない作品がある(樽目録第10版を見てほしい)。

原著者を出さなかったとって劉半農、胡適、魯迅、周作人らを瀬戸博士は批判したのだろうか。事実を知らなければ批判のしようもないが。

瀬戸博士が林紵のみを取り上げて批判するのはなぜなのか。瀬戸博士が従来から林訳についての考察を積み重ねてきてやはり林紵は有罪だと結論づけたとは見えない。だいいち林紵が冤罪である証拠が提出されているにもかかわらず有罪を主張するのは論理的に成り立たないことは明らかだ。そうすると結論はひとつである。林紵を批判することが瀬戸博士のなかで先に決定されているからだろう。批判するために批判をしている。林紵に狙いを定めて放った「区別がつかない論」の矢はもどってきて瞬時に文学革命派と瀬戸博士自身を確実に射る。「区別がつかない論」を持ち出す人について私が以前から指摘していることだ。

つぎに別の具体例を示す。文明戯シェイクスピアだ。「中国現代文学演劇研究の末席に連なっている」(317頁) 専門家の瀬戸博士だからこそ、その発言が特別に興味深い問題となる。

文明戯シェイクスピアは、林訳『吟辺燕語』にもとづき粗筋を借りるだけで台詞は自由に創作した。重ねていうが英文莎劇本を直接の底本

にしてはいない。小説化したラム本(シェイクスピア作品ではないもの=瀬戸博士説)の漢訳『吟辺燕語』を使用している。しかも底本が林訳であることにはほとんど触れない。上演を知らせる新聞広告では莎氏、莎劇そのものだと大書した(シェイクスピア作品として紹介した=瀬戸博士説)。莎氏を前面に押し出しラムを完全に隠蔽している。

文明戯シェイクスピアこそが、瀬戸博士が「追加1」で述べた「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介した」典型的な実例である。これほど実態をあからさまにした説明はない。しかも林紵を非難するために瀬戸博士が創出した表現なのだ。それが林紵ではなく文明戯に当てはまってしまうとは書いた本人も想像しなかっただろう。理解していればはじめから持ち出しはしなかったはずだ。

文明戯シェイクスピアは、小説を戯曲に書き直すからラム姉弟とは逆方向の作業をやったのけた芝居だ。私は「莎劇のようなもの」すなわち「莎劇もどき」と表現している。瀬戸博士は林紵と林訳についてはあれほど激しく攻撃批判した。だが莎氏を強調した莎劇もどきの文明戯シェイクスピアについてはひとつも非難しない(喪失4)。

瀬戸博士が特別に考えだし提出した言辭は林訳ではなく文学革命派に通用し、分野を飛び越えて実のところ文明戯シェイクスピアそのものを指している。林訳を非難したつもりが瀬戸博士の専門とする文明戯シェイクスピアの虚構を自分で暴露してしまった。最初に意図したものではない結果になったわけだ。それだけでは終わらない。評価の二重基準を瀬戸博士自らが実施していることを周知徹底させてしまった。「意表之外」というか。しかしそれが残酷な現実だ。これほどの笑劇、茶番劇があるだろうか。

林紵については根拠なく誹謗し、瀬戸博士の基準からいえば当然非難されるべき条件を満たしている文明戯シェイクスピアについてはだん

まりを決め込む。一方にはくりかえし中傷し片方には沈黙する。瀬戸博士著『中国のシェイクスピア』1冊に両者を混在させて無関心である。ここまで露骨で赤裸々な評価の二重基準(喪失5)は見たことがない。研究者としては致命的な行為だといって過言ではなかろう。瀬戸博士が二重基準を実行するところだけ見ても研究者として盛大に爆死している。ただ自爆したという自覚がないようだ。

瀬戸博士は1冊の書物の中で研究者としての生命を少なくとも5回は喪失している。1 被害者に成りすます論、2 区別がつかない論、3 シェイクスピア作品でないもの論、4 莎劇もどき論、5 評価の二重基準である。普通の研究者ではなかなかこうはできない。

自爆のあとに残った事実がひとつある。瀬戸博士の素顔が明らかになった。瀬戸博士は中国で著名な知識人林紓の人権を平気で蹂躪する人物である。

瀬戸博士が林紓を批判するために提出した説明はいずれも的外れだ。その結果は自分の意図したものにはならなかった。瀬戸博士にとっては悲劇に違いない。しかし観客にしてみればこれはまさに喜劇だ。林紓を狙撃したつもりの瀬戸博士が自分で自分の後頭部をおもいきり殴りつけているからだ。しかも力が入りすぎて自己崩壊してしまった。

以上は瀬戸博士が一人芝居を演じてたどりついた結末である。目の前で展開している情景に私はわが目を疑いそうになり一瞬息がつかまってマカダミア風味コナ10%コーヒーをふいた。これほど人を笑わせてくれる演技者も珍しい。

瀬戸博士の漢訳シェイクスピア関係でいうと付け加えるとすれば次のことくらいか。

『瀟外奇譚』の漢訳者が莎氏とラム本について正しく説明しているにもかかわらず瀬戸博士はわざと曲解して漢訳者が誤解していると批判した。銭玄同と劉半農に続いた胡適の林訳批判について間違った説明をした。文明戯「竊国賊

(ハムレット)」の上海初演に関して初演ではないものを初演であるかのように文献操作をした。田漢漢訳『ハムレット』では証拠を示さずに「日本語からの重訳の可能性が強い」と無責任に書いて誤った。

「中国現代文学演劇研究」専門家の瀬戸博士は、自著『中国のシェイクスピア』という同じ書物のなかで研究者生命を5回も喪失した。それ以外に中小規模の自爆をこれほどしている。それぞれについて私は詳細に論じた文章を公表した。興味のある方は清末小説研究会ウェブサイトでご覧いただきたい。

証拠資料の有無は瀬戸博士の研究には影響しないようだ。先に下した結論が成立するように妄想をくりひろげて作文をするだけの作業に専念する。論理の一貫性などどうでもいいらしい。新しい資料を発掘して立論しようという考えはもとから皆無なのである。なるほど林訳莎氏については銭玄同、劉半農、胡適、鄭振鐸、阿英の昔から現在までの中国学界にはなじみのやり方なのだ。林紓の人権を踏みにじり名誉を毀損した。瀬戸博士自身にその認識がないから林紓批判を続けているのだろう。

いうまでもなく中国学界はそれ特有の原理原則で動いている。日本の瀬戸博士がほかでもないその中国学界に事大する。事実を軽視して林紓の冤罪を否定し彼の有罪を主張する。まさに特記すべき事柄だと指摘しておく。私には私の原則がありそれは中国学界とは一致しないだけだ。

「私が今まで読んできた漢訳シェイクスピア関係の論文のなかで、瀬戸博士のものは最悪最低である」と書いたことがある(アマゾン日本の読者書評。削除されて現在は見ることはできない。アマゾン画面の複写を清末小説研究会ウェブサイト(2018.5.7)に掲載。本文は『清末小説三談』所収)。その判断は今も変わらない。その最悪最低であるものが漢訳刊行された。

(日)瀬戸宏著、陳凌虹訳『莎士比亞在中國：中国人的莎士比亞接受史』(広州・広東人民出

版社2017)だ。

中国のウェブサイト「豆瓣読書」を見れば該書について複数の人が意見を書き込んでいる。ひとりの読者は書名を改める方がよいという。『中国公認を主流としたシェイクスピア受容史 [中国官方主流的莎士比亚接受史]』である(2017.7.16確認)。漢訳副題をもじったものだ。提案するだけで説明はない。

私がかわって解説する。「官方」とは普通には政府筋を意味する。権威を持つ。その実体は中国学界に公認された権威ある解釈そのものだ。中国学界こそが林紓批判を強く推進し維持した。その学界公認の視点を主流にする莎氏受容史ということ。つまり日本の瀬戸博士が中国学界公認の見解を忠実に遵守した専門書を書いたという意味になる。従来からある林訳批判をくり返しただけで新しい発見がないと指摘したに等しい。中国人の読者は瀬戸博士の事大主義を見抜いている。その人は評価として星4個をつけた。「中国官方」を出したから低く採点することは許されない。高評価を装った皮肉だと思われる。

瀬戸博士とその周囲には、私の考える研究とは違う世界が広がっている。瀬戸博士の論文には事実を尊重する態度が見えない。あらかじめ定めた主義主張、あるいはすでに下されている特定の結論に合わせて現実を解釈する。ゆえに自分の立論に適合しない不都合な事実は無視するのである。林訳を批判する瀬戸博士の文章に新発見がないのも納得する。研究者として自爆死した瀬戸博士に言ってもムダなことだろう。

書いておく。研究者生命を喪失しているからといってそれで林紓の人権を侵害している瀬戸博士が免罪されるわけではない。

残念ながら紙幅がなくなった。日本語論文から無断借用した王立言、知っていながら先行論文を無視した宋声泉、あるいはコナン・ドイルが創作したシャーロック・ホームズと贗作ホームズの違いに気づかない研究者たち。それらについては別の機会に譲る。 ㊦

## 莎劇のよなもの(下)

——文明戯シェイクスピア

神田 一三

最後に文明戯「肉券」を紹介する文章から該当部分を『新劇考』(1914)と『新劇考証百出』(1919)から引用する。

『新劇考』

薛禄克

薛(禄克)故与安(東尼)有夙嫌, 署券時, 謂逾期不償, 須罰割肌肉一磅。[范42頁]

薛(禄克)故与安(東尼)有夙怨, 署券時, 謂逾期不歸趙, 当割肉一磅為罰。[范44頁]

『新劇考証百出』

歇洛克

乃与安(東尼)訂約。苟逾期勿償者。須割胸頭肉一磅。[鄭177、346頁]

シャイロックの漢訳に薛禄克と歇洛克(林訳で登場)を当てる。音訳だからどちらでもかまわない。

上記の3文章を見れば表現がそっくりだ。契約、肉切り1ポンドはあるが冗談がないところまで共通する。似ているのだが「肌肉」は筋肉だし「肉」はそのまま、「胸頭肉」は胸肉か。シャイロックが望む部位は特定されていないから胸肉ははずれる。というように微妙に違うのも台詞そのものを採取していないからだ。

私の知るかぎり義華の紹介を除いて文明戯シ  
ェイクスピアについての具体的な内容(脚本、  
台詞)を示す資料が把握できない。その結果、  
学術論文が外部資料を提示するだけに終始す  
るのも当たり前だ。 四

附録：文明戯シェイクスピア一覽

林訳『吟辺燕語』の原題順に配置し便宜的に数字  
をつけた。改行して文明戯の題名を示す。年月日の  
明確なもの順。参考文献の略号が判別しづらいかも  
もしれない。略号の数字は頁数を示す。根拠がある  
というためだけに記した。×印は間違いを意味する。  
参考文献の順番を見ればどれが最初に指摘したの  
かがほぼわかるだろう。陰暦は旧暦と表示する。

- [范] 范石渠原著、趙驥校勘『新劇考』上海・中華  
図書館1914.6/上海・文匯出版社2015.10復刻本  
による
- [鄭] 鄭正秋編、趙驥校勘『新劇考証百出』上海・  
中華図書集成公司1919.4.10/北京・学苑出版社  
2016.1影印本
- [匡] 匡映輝「解放前我国舞台上的莎翁戲劇」『戲  
劇報』1986年第4期(総第347期)1986.4.18
- [申] 倪百賢、王潮鳳編 朱建明校「《申報》戯曲文  
章索引」中国戯曲志上海卷編輯部『上海戯曲史料  
薈萃』総4期(第4集)上海藝術研究所1987.9.20
- [汪] 汪義群「莎劇演出在我国戯劇舞台上的變遷」  
中国莎士比亚研究会編『莎士比亚在中国』上海文  
藝出版社1987.12
- [曹] 曹樹鈞+孫福良『莎士比亚在中国舞台上』哈  
爾濱出版社1989.4
- [孟] 孟憲強『中国莎学簡史』長春・東北師範大学  
出版社1994.8。140-141、458-459頁を参照した
- [王] 王建開「藝術与宣伝：莎劇訳介与20世紀前半  
中国社会進程」台湾『中外文学』第33卷第11期  
(総第395期)2005.4。
- [郝] 郝嵐「莎士比亚在1916年前的中国」『清末小  
説から』第91号2008.10.1
- [趙] 趙驥「笑舞台与上海文明戯」『杭州師範大学  
学報(社会科学版)』2010年第2期2010.3
- [驥] 趙驥「鄭正秋對於莎士比亚演劇之貢獻」『雲  
南藝術学院学报』2016年第3期2016.9.25
- [黄] 黄愛華「上海笑舞台的變遷及演劇活動考論」  
袁国興『清末民初新潮演劇研究』広州・広東人民  
出版社2011.1
- [愛] 黄愛華「笑舞台与文明新戯後期劇壇」『中国  
現代文学論叢』第8卷第1期2013.8.1
- [華] 黄愛華「笑舞台的崛起及其对文明新戯後期劇  
壇的意義」『首都師範大学学報(社会科学版)』  
2015年第4期(総第225期)2015.8.25(注：題目  
だけあげて上演日時が不明確なものは採取してい  
ない)
- [張] 張治『中西因縁：近現代文学視野中的西方  
「經典」』上海社会科学院出版社2012.8
- [春] 瀬戸宏「申報所載春柳社上演廣告(下の一)」  
『長崎総合科学大学紀要』第30巻第2号1989.11
- [新] 瀬戸宏「新民主上演演目一覽」『撰大人文学  
』第9号2001.9
- [民] 瀬戸宏『民鳴社上演演目一覽』翠書房2003.2.28
- [近] 趙山林、田根勝、朱崇志編著『近代上海戯曲系年  
初編』上海世紀出版集团、上海教育出版社2003.7
- [中] 趙山林『中国近代戯曲編年(1840-1919)』上  
海・華東師範大学出版社2008.9
- [李] 李爽『中外文学關係論稿』台湾・聯経出版  
事業股份有限公司2015.1
- [瀬] 瀬戸宏『中国のシェイクスピア』松木工房2016.2.29。  
67-68頁に見える作品名の誤記はいちいち指摘し  
ない
- [寧] 劉寧寧『莎士比亚在上海(1949年前)——以  
《申報》为中心』上海・華東師範大学碩士学位論  
文2016.5.17

- 1 ◆肉券 THE MERCHANT OF VENICE ヴェニス商人  
(→女律師[瀬73]包天笑1911年頃城東女学[瀬84]  
1912(注：素人演劇で文明劇ではない))  
→女律師[王36]1912.12  
→肉券[曹219]鄭正秋領導の文明戯職業劇団新民主  
1913.3公演  
→肉券[孟458]鄭正秋領導の新民主1913.3公演  
→肉券[匡58]1913.7鄭正秋組織新民主新劇社  
→肉券[郝21]鄭正秋領導の新民主1913.7公演

→肉券 [汪92] (威尼斯商人) 鄭正秋導演1913  
 →肉券 [曹73] 鄭正秋1913  
 →女律師 [曹219] 陸鏡若組織新劇同志会公演1914. 2. 16  
 →女律師 [孟458] 陸鏡若新劇同志会1914. 2. 16演出  
 →女律師 [近254] 1914. 3. 5上海六大文明戲劇團組成新劇公会, 進行聯合公演 (注: [中336] で1914. 4に移動させる)  
 →女律師 [瀨76] 申報1914. 4. 5新民主社廣告 [新127] 同左  
 →女律師 [驥35] 申報1914. 4. 5新民主社廣告  
 →女律師 [寧23] 申報1914. 4. 5新民主社廣告  
 →女律師 [寧38] 申報1914. 4. 5  
 →女律師 [中336] 1914. 4上海六大文明戲劇團組成新劇公会, 進行聯合公演 (注: [近254] 1914. 3. 5から移動させる)  
 →肉券 [驥39] 申報1914. 5. 1廣告  
 →肉券 [黃303] 申報1914. 5. 5笑舞台演出廣告  
 →肉券 [驥36] 上海新劇公会六大劇團聯合演劇、申報旧曆4. 11 (1914. 5. 5) ([驥36] 女律師、肉券、借債割肉)  
 →肉券 [新128] 新報1914. 5. 13新民主社廣告  
 →肉券 [驥36] 新民主社1914. 5. 13  
 →女律師 [瀨80] 1914. 5. 29新民主社 ([新129] 同左)、7. 15 ([新131] 同左)、11. 7 ([新131] 同左) [瀨81] 1914. 11. 30新民主社 ([新132] 同左)  
 →肉券 [新130] 申報1914. 6. 14新民主社廣告  
 →肉券 [愛85] 六大劇社參演1914. 6  
 →女律師 [鄭177] 申報1914. 7. 15新民主社廣告  
 →女律師 [驥37] 1914. 7. 15新民主社上演  
 →女律師 [范162注1] 申報1914. 7. 15  
 →女律師 [曹73] 六大劇團聯合公演1914  
 →女律師 [郝21] 新劇同志会1914公演  
 →女律師 [瀨81] 1915. 1. 29民鳴社 [民14] 同左  
 →女律師 [寧40] 申報1915. 1. 29廣告  
 →女律師 [曹74] 又名借債割肉。陸鏡若1915. 2. 16 [曹76] 陸鏡若春柳劇場1915  
 →借債割肉 [匡58] 民鳴社旧曆1915. 5. 12 (1915. 6. 24)  
 →借債割肉 [曹73] 民鳴社旧曆1915. 5. 12 (1915. 6. 24)  
 →借債割肉 [曹220] 民鳴社旧曆1915. 5. 12 (1915. 6. 24)  
 →借債割肉 [孟458] 民鳴社旧曆1915. 5. 12 (1915. 6. 24) 演出

→借債割肉 [王36] 民鳴社旧曆1915. 5. 12 (1915. 6. 24)  
 →借債割肉 [郝21] 民鳴社旧曆1915. 5. 12 (1915. 6. 24) 演出  
 →女律師 [匡58] 春柳劇場1916. 2. 16  
 →女律師 [汪93] 民国日報1916. 5. 25笑舞台廣告  
 →女律師 [曹78] 民国日報1916. 5. 25廣告  
 →女律師 [王36] 民国日報1916. 5. 25笑舞台廣告  
 →女律師 [郝23] 民国日報1916. 5. 25廣告  
 →女律師 [曹220] 笑舞台1916. 5公演  
 →女律師 [孟459] 笑舞台1916. 5公演  
 →女律師 [郝17] 笑舞台1916. 5公演  
 →女律師 [黃305] 民国日報1916. 7笑舞台廣告  
 →女律師 [驥39] 申報1916. 9. 3  
 →借債割肉 [驥38] 1916. 9. 22 [驥39] 申報1916. 9. 22 廣告  
 →女律師 [汪92] 1916  
 →女律師 [驥37] 申報1918. 1. 10鳴新社。借債割肉 [驥39] 申報1918. 1. 10廣告  
 →肉券 [寧41] 申報1922. 9. 10笑舞台廣告  
 →肉券 [鄭177、346]  
 →女律師 [孟140]  
 →肉券 [曹77]  
 →女律師 [曹77]  
 →一磅肉 [曹77]  
 →一磅肉 [孟140]  
 →借債割肉 [曹77]  
 →借債割肉 [孟140]  
 →女律師 [瀨82] 笑舞台  
 2 ◆馴悍 THE TAMING OF THE SHREW じゃじゃ馬馴らし  
 (→馴悍記 [申26] 申報1913. 10. 31癡僧「紀“新民新劇社”演出之《馴悍記》(即《新旧夫妻》)」 [瀨76] 申報1913. 10. 15新民主社廣告 (シェイクスピアとは無関係であろう) [瀨81] 1914. 7. 14新民主社廣告 ([新131] 同左)、1914. 11. 10新民主社廣告 ([新131] 同左))  
 →馴悍 [曹219] 春柳同人吳我尊等人与湘春園漢調戲班, 在長沙寿春園演出1913. 12. 9-23  
 →馴悍 [孟458] 吳我尊等人1913. 12. 9-23公演  
 →馴悍 [郝21] 吳我尊等人1913. 12. 9-23公演  
 →殺淫 申報1916. 4. 30笑舞台廣告  
 →殺淫 [驥36] 馴悍、馴悍記 [驥39] 申報1916. 9. 3



→殺淫 [寧77] 申報1916.4.30笑舞台廣告(注:原作が馴悍だとは指摘していない)

→馴悍 [孟458] 1914年先後演出

→馴悍記 [曹220] 陸鏡若春柳劇場1914

→馴悍記 [郝21] 陸鏡若春柳劇場1914演出

→馴悍 [鄭178] 申報1917.5.26春柳劇場新劇同志会廣告

→馴悍 [鄭178、346]

→馴悍 [曹76] 即馴悍記。陸鏡若

→馴悍 [曹77]

→馴悍 [孟140]

3◆學誤 THE COMEDY OF ERRORS 間違いの喜劇

→學誤 [鄭179、347]

→學誤 [曹77]

→學誤 [孟141]

4◆鑄情 ROMEO AND JULIET ロミオとジュリエット  
(→若邈久嫻新彈詞 [李229] 1910。民謡体。第2幕第2景)

→鑄情 [孟458] 1914年先後演出

→鑄情 [曹220] 陸鏡若春柳劇場1914

→鑄情 [郝21] 陸鏡若春柳劇場1914演出

→冤縁 申報1916.3.21笑舞台廣告

→冤縁 [驥36] 鑄情

→鑄情 [鄭181、348]

→鑄情 [曹76] 陸鏡若

→鑄情 [曹77]

→鑄情 [孟141]

5◆仇金 TIMON OF ATHENS アテネのタイモン

→仇金 [鄭182、349]

→仇金 [曹77]

→仇金 [孟141]

6◆神合 PERICLES, PRINCE OF TYRE ペリクリーズ

→柏立格而 [鄭183、349]

→柏立格 [曹77]

→柏立格 [孟141]

→沈珠記 [曹77]

→沈珠記 [孟141]

7◆蠱傲 MACBETH マクベス

→新南北和 [汪92] 1916

→(演題不記) [匡59] 1916鄭正秋將莎士比亞的《馬克白斯》改編成幕表戲

×→竊國賊 [曹80、220] とするは誤り

×→竊國賊 [孟140、459] とするは誤り

→巫禍 [鄭185、350]

→巫禍 [曹77、80]

→巫禍 [孟140]

→新南北和 [曹77]

→新南北和 [孟140]

8◆醫諧 ALL'S WELL THAT ENDS WELL 終わりよければすべてよし

→醫諧 申報1916.1.20民鳴社廣告

→醫諧 [驥39] 申報1916.1.20廣告

→醫諧 申報1916.1.21民鳴社廣告

→醫諧 [民25] 申報1916.1.21民鳴社廣告

→醫生女 [鄭186、351] 趙驥は注で「女醫生」とする

→醫生女 [曹77]

→醫生女 [孟141]

9◆獄配 MEASURE FOR MEASURE 尺には尺を

→獄配 申報1916.1.20民鳴社廣告

→獄配 [民25] 申報1916.1.20民鳴社廣告

→獄配 [驥39] 申報1916.1.20廣告

→假面具 申報1916.3.17笑舞台廣告

→假面具 [寧42] 申報1916.3.17笑舞台廣告

→假面具 申報1916.4.23笑舞台廣告

?→退位 [寧43] 申報1916.4.28笑舞台廣告(注:該号には掲載されていない)

→退位 [驥37] 申報1916.6.17笑舞台 [驥39] 申報1916.9.3

→退位 [驥39] 1916 [驥39] 申報1918.9.9廣告

→假面具 [曹78] 1917年旧曆2.14 (1917.3.7) 演出的《假面具》(《一報還一報》)的改編

→假面具 [曹221] 1917年旧曆2.14 (1917.3.7) 笑舞台公演、根據《一報還一報》改編

→假面具 [孟459] 笑舞台1917.2.14ママ公演根據《一報還一報》改編的

→假面具 [匡59] 1917年旧曆2月笑舞台再次演出了根據莎劇《一報還一報》改編的

→假面具 [寧41] 申報1918.9.9「退位」([寧43] 獄配、一報還一報、量罪記 [朱生豪])

→退位 [驥36]

→假面具 [曹77]

→維也納大公 [鄭188、351]

→維也納大公 [曹77]  
 →維也納大公 [孟141]  
 →假面具 [孟141] ≪一報還一報≫MEASURE FOR MEASURE とする  
 10◆鬼詔 HAMLET, PRINCE OF DENMARK ハムレット  
 →殺兄奪嫂 [匡58] 民国初年四川雅安川劇団  
 →殺兄奪嫂 [曹80] 民国初年四川雅安川劇団  
 →殺兄奪嫂 [曹220] 民国初年四川雅安川劇団  
 →殺兄奪嫂 [王36] 民国初年四川雅安川劇団の地方戯  
 ×→竊国賊 [汪93] 民国日報1916. 3. 11笑舞台広告 (該号に広告なし)  
 ×→竊国賊 [曹79] 民国日報1916. 3. 11広告 (該号に広告なし)  
 ×→竊国賊 [王36] 民国日報1916. 3. 11笑舞台広告 (該号に広告なし)  
 ×→竊国賊 [郝23] 民国日報1916. 3. 11広告 (該号に広告なし)  
 ×→竊国賊 [張192] 民国日報1916. 3. 11広告 (該号に広告なし)  
 →竊国賊 申報1916. 4. 27笑舞台広告  
 →竊国賊 申報1916. 4. 28笑舞台広告  
 →竊国賊 申報1916. 5. 7笑舞台広告  
 →竊国賊 [瀨191] 申報1916. 5. 7笑舞台広告、8. 6廣告、9. 29廣告  
 →竊国賊 [寧23] 申報1916. 5. 7笑舞台  
 →竊国賊 [黄302] 時報1916. 5. 31笑舞台広告  
 →竊国賊 [趙55] 時報1916. 5. 31笑舞台  
 →竊国賊 [驥37] 申報1916. 6. 17笑舞台  
 →竊国賊 [寧23] 申報1916. 8. 6笑舞台 [寧44] 同左  
 →竊国賊 [民26] 申報1916. 9. 3民鳴社廣告  
 →竊国賊 [驥37] 申報丙辰八月初六日 (1916. 9. 3) 民鳴社  
 →竊国賊 [民28] 申報1916. 11. 25民鳴社廣告  
 →篡位竊嫂 [匡59] 導社1916 (原名乱世姦雄)  
 →篡位竊嫂 [孟459] 導社1916公演 (原名乱世姦雄)  
 →篡位竊嫂 [郝17] 導社1916公演 (原名乱世姦雄)  
 →竊国賊 [曹80] 鄭正秋葉風新劇社 (原題を麥克白と誤る)  
 →竊国賊 [曹220] 鄭正秋葉風新劇社 (原題を麥克白と誤る)  
 →竊国賊 [孟459] 鄭正秋葉風新劇社1916公演 ( [孟

140、459] は原題を麥克白と誤る)  
 →竊国賊 [郝17] 鄭正秋葉風新劇社1916公演  
 →哈姆雷特 [匡59] 笑舞台1916年春  
 →漢姆萊特 [曹78] 笑舞台1916年春  
 →韓姆列王子 [曹220] 笑舞台1916年春  
 →韓姆烈王子 [孟459] 徐半梅等人笑舞台1916公演  
 →韓姆烈王子 [郝17] 徐半梅等人笑舞台1916公演  
 →竊国賊 [汪92] 1916  
 →篡位盜嫂 [曹220] 導社公演 (又名乱世姦雄) 1916  
 →竊国賊 [驥38] 1916 [驥39] 申報1918. 9. 9廣告  
 →竊国賊 [驥39] 申報1917. 12. 15廣告  
 →竊国賊 [驥37] 1918. 6. 16、8. 7、8. 18 [驥39] 申報1918. 4. 28廣告 [驥39] 申報1918. 6. 16廣告 [驥39] 申報1918. 8. 18廣告  
 →竊国賊 [驥38] 1918. 8. 7 [驥39] 申報1918. 8. 7廣告  
 →太子装瘋 [寧41] 申報1923. 9. 22笑舞台廣告  
 →乱国奸雄 [寧45] 1925. 12. 29  
 →鬼詔 [鄭190、353]  
 →鬼詔 [曹77]  
 →竊国賊 [曹77]  
 →竊国賊 [驥36]  
 →篡位盜嫂 [曹80] 導社公演 (又名乱世姦雄)  
 →篡位盜嫂 [孟140]  
 11◆環証 CYMBELINE シンペリン  
 →金環鉄証 [寧77] 申報1916. 6. 20笑舞台廣告  
 →金環鉄証 [黄303] 時報1916. 7笑舞台 [愛91] 同左 [華101] 同左  
 →金環鉄証 [趙55] 民国日報  
 →指環恩仇 [鄭195、356]  
 →指環恩怨 [曹77]  
 →指環恩仇 [孟141]  
 →金環鉄証 [瀨82] 笑舞台  
 12◆女変 KING LEAR リア王  
 →姉妹皇帝 [黄305] 民国日報1916. 7笑舞台廣告  
 →姉妹皇帝 [汪92] 1916笑舞台  
 →姉妹皇帝 [驥36]  
 →口孝与心孝 [鄭192、354]  
 →口孝与心孝 [曹77]  
 →口孝与心孝 [孟140]  
 →姐妹皇帝 [曹77]  
 →姐妹皇帝 [孟140]

13◆林集 AS YOU LIKE IT お気に召すまま  
 →従姉妹 [鄭197、357]  
 →従姉妹 [孟141]  
 14◆礼哄 MUCH ADO ABOUT NOTHING から騒ぎ  
 →冤乎 申報1916.1.20民鳴社広告の中に見える  
 →怨偶成嘉偶 [鄭199、358]  
 →怨偶成佳偶 [曹77]  
 →怨偶成佳偶 [孟141]  
 →冤乎 [驥36]  
 15◆仙猶 A MIDSUMMER NIGHT'S DREAM 夏の夜の夢  
 →夏夜夢 [鄭200、359]  
 × [曹77] 未収録  
 × [孟140-141] 未収録  
 16◆珠還 THE WINTER'S TALE 冬物語  
 →皇后再生記 [寧24] 申報1922.10.10笑舞台  
 →像活 [鄭202、360]  
 →像話 [曹77]  
 →像話 [孟141]  
 17◆黒脊 OTHELLO オセロ  
 →奥賽羅 [曹220] 陸鏡若改編演出1914  
 →倭塞羅 [郝21] 陸鏡若春柳劇場1914演出  
 →奥瑟羅 [孟458] 1914年先後演出  
 →春夢 [春339] 申報春柳社1915.4.3広告(春夢為英国莎士比亞名著, 原名倭塞羅)  
 →春夢 [瀨81] 陸鏡若春柳社1915.4.3  
 →黒將軍 [汪93] 民国日報1916.7.17笑舞台広告  
 →黒將軍 [曹78] 民国日報1916.7.17広告  
 →黒將軍 [王36] 民国日報1916.7.17笑舞台広告  
 →黒將軍 [郝23] 民国日報1916.7.17広告  
 →黒將軍 [曹221] 笑舞台1916.7公演  
 →黒將軍 [孟459] 笑舞台1916.7公演  
 →黒將軍 [郝17] 笑舞台1916.7公演  
 →黒將軍 [黄305] 民国日報1916.7笑舞台広告  
 →黒將軍 [汪92] 1916笑舞台  
 →禍国將軍 [民29] 申報1917.1.1民鳴社広告(莎士比亞名著)  
 →黒將軍 [寧41] 申報1923.11.7笑舞台和平新劇社広告  
 →倭塞羅 [鄭224、369] 鏡若訳編  
 →倭塞羅 [黄303] 陸鏡若訳編  
 →倭塞羅 [曹76] 陸鏡若  
 →倭塞羅 [曹77]

→倭塞羅 [孟140]  
 →黒將軍 [曹77]  
 →黒將軍 [孟140]  
 →黒將軍 [黄303]  
 →黒將軍 [瀨82] 笑舞台  
 →黒將軍 [驥36]  
 →禍国將軍 [驥36]  
 18◆婚詭 TWELFTH NIGHT; OR WHAT YOU WILL 十二夜  
 →孿生兄妹 [鄭204、361]  
 →孿生姐妹 [曹77]  
 →孿生姐妹 [孟141]  
 19◆情感 THE TWO GENTLEMEN OF VERONA 二人の貴公子  
 →情感 [鄭206、363]  
 →情感 [曹77]  
 →情感 [孟141]  
 20◆颯引 THE TEMPEST テンペスト  
 →颯媒 [鄭208、364] 趙驥は注で颯引の誤りと疑う  
 →颯媒 [曹77]  
 →颯媒 [孟141]  
 →春夢 [驥36]

◆原作不明

盜情 [驥39] 申報1916.4.14「笑舞台三月一夜準演正秋新編莎士比亞名著《盜情》」(注:旧曆と新曆が一致しない)  
 盜情 [寧41] 申報196.4.14笑舞台広告 [曹77] 同左  
 女説客 [驥37] [驥39] 申報1916.9.3  
 女国手 [寧41] 申報1916.6.16笑舞台広告 [曹77] 同左  
 女国手 [驥37] [驥39] 申報1916.9.3  
 歡喜冤家 [寧41] 申報1917.10.16鳴新社広告 [曹77] 同左  
 双双双胞胎 [寧45] 申報1920.9.16笑舞台広告  
 双双双胞胎 [寧41] 申報1920.11.27和平社笑舞台新劇部広告

清末小説から

岩原康夫○エズラ・パウンドと中国詩:パウンド、アレン・アップワード、そしてH・A・ジャイルズの『中国文学史』『工学院大学共通課程研究論叢』43(2)2006.2.28 電字版  
 水沢不二夫○『検閲と発禁——近代日本の言論統制』

- 森話社2016. 12. 19
- 吳 永貴○石峰主編『中国期刊史 第二卷(1911-1949)』北京・人民出版社2017. 12
- 董 仁威○『中国百年科幻史話』北京・清華大学出版社2017. 12
- 劉鄂(鶚、劉鉄雲)著○『老殘遊記(漢日对照)』20回 2冊(日)岡崎俊夫訳 孫蓮花、(日)齋藤齊、林楽常、林楽青校訳(審訳)大連理工大学出版社2018. 1 大中華文庫
- 陳 大康○『中国近代小説史論』北京・人民文学出版社2018. 3 国家哲学社会科学成果文庫
- 胡適訳、王新禧編注○『胡適訳小説与翻譯詩歌全集』長春・時代文藝出版社2018. 4
- 王 新禧○編者序言：別求新声於異邦，引来春水開先河——胡適の翻譯小説与翻譯詩歌 胡適訳、王新禧編注『胡適訳小説与翻譯詩歌全集』長春・時代文藝出版社2018. 4
- 趙 雁風○『多重視角下的近代中日文学比較研究』長春・東北師範大学出版社2018. 5
- 姚 達兌○『近代文化交渉与比較文学』北京・中国社会科学出版社2018. 7
- 宋 雪○晚清小説中の“末日”与“未来”——梁訳《世界末日記》の意義『明清小説研究』2018年第3期(総第129期) 2018. 7. 15
- 劉 鵬○晚清滬外小説専刊《揚子江小説報》研究『明清小説研究』2018年第3期(総第129期) 2018. 7. 15
- 馬 雲○『中国近現代人文幻想小説研究』北京・中国社会科学出版社2018. 8
- 欒 梅健○追趕文学風潮の時髦人——重論《啼笑因縁》の文学史意義『中国現代文学研究叢刊』2018年第8期(総第229期) 2018. 8. 15
- 関 愛和○梁啓超“新民説”格局中の史学与文学革命『文学遺産』2018年第5期 2018. 9. 15
- 張 悦○論女性在晚清科幻小説中の“缺席”『中国現代文学研究叢刊』2018年第9期(総第230期) 2018. 8. 15
- 陳 平原○『左図右史与西学東漸——晚清画報研究』北京・生活・読書・新知三聯書店2018. 10
- 『触摸歴史与進入五四』北京大学出版社2018. 10
- 文 娟○試論吳禱在中国近代小説翻譯史中的地位——以商務印書館所刊單行本為研究視角『明清小説研究』2018年第4期(総第130期) 2018. 10. 15
- 朱 軍○女媧氏之影：晚清女權叙事的神話与啓蒙『中国現代文学研究叢刊』2018年第10期(総第231期) 2018. 10. 15
- 藤井得弘○清末小説『鴉片案』論——探偵小説と譴責小説との接点を手掛かりに『中華文藝の饗宴 『野草』第百号』研文出版 2018. 11. 30
- 林紓○『林紓訳文全集』全47冊 上海書店出版社編 上海書店出版社2018. 3
- 上海書店出版社○(『林紓訳文全集』)出版説明 林紓 上海書店出版社編『林紓訳文全集』全47冊 上海書店出版社2018. 3
- 吳 興文○(『林紓訳文全集』)序言 林紓 上海書店出版社編『林紓訳文全集』全47冊 上海書店出版社2018. 3
- 常 方舟○【書評】遲到却不应缺席的正名——評樽本照雄《林紓冤案事件簿》 掲載誌不明 2018. 10
- czjrs(蘇建新)○【書評】海外林紓研究的一部大手筆鉅作：読《林紓冤案事件簿》有感 ウェブサイト「個人図書館」2018. 10. 4 電字版
- 袁 筱一○【書評】再談林紓翻譯引発の争議『文匯報』2018. 12. 11 電字版

